

## 少年院在院者の自己効力の変化に関する研究（その1）

矯正協会附属中央研究所 保木 正和  
 古曳 牧人  
 末永 清  
 矯正研修所東京支所 工藤 弘人\*

キーワード：自己効力，自己効力感，セルフ・エフィカシー，効力予期，結果予期，処遇効果

### I はじめに

少年院における効果的な矯正教育の在り方や適正な成績評価の在り方については、これまでに多くの研究・考察がなされているところである。同時に、その裏付けとなる処遇効果の検証に関しても、少年院在院者のどのような特性に注目し、また、それをいかに測定するかについて、様々な試みがなされてきている。

本研究は、少年院における教育によって少年の価値観や行動における変化が期待される特性として、自己効力（self-efficacy；自己効力感とも訳されるが、本研究では、「自己効力」とする。）を取り上げる。

自己効力とは、スタンフォード大学のアルバート・バンデューラ（Albert Bandura）が、社会的学習理論（social learning theory）の中で提唱した概念であり、社会的行動や動機付けとの関連が深いとされるものである。

彼の理論では、人間の行動を決定する要因として、先行要因、結果要因及び認知的要因の三つが仮定されているが、このうちの先行要因には、結果予期（outcome-expectancy）と効力予期（efficacy-expectancy）があるとされる。

結果予期とは、ある行動がどのような結果を引き起こすかという予期であり、これに対して、効力予期とは、ある結果を達成するために必要な行動を自分がうまくできるかどうかの予期である。

そして、自己効力とは、個人に認知された効力予期をいう。換言すると、「ある状況において必要な行動を効果的に遂行できるという確信の意味」（祐宗他，1985）ということになる。結果予期と効力予期が共に高ければ、積極的に適切な行動を取ることがで

---

\* 前矯正協会附属中央研究所

きるが、結果予期と効力予期の高低の組み合わせにより、行動や情緒的状态は様々な影響を受けるとされている (Bandura, 1985)。

自己効力は、個人に認知されたものであるので、質問紙等による測定が容易なこと、また、周囲からの働き掛けなどによって自己効力を向上させることが可能であり、それによる行動変容も期待できることなどから、これまで多くの研究が行われている。このような中で、行動遂行の有効な予測因子であることが確認され、教育や臨床心理等にも応用分野が広がっており、また、仕事や対人関係における自己効力を測定する尺度が開発されている。

ところで、自己効力に類似した概念として、White (1959) が提唱したコンピテンス (competence) がある。これは、環境に対して効果的に働きかける一般的能力を指すものである。Bandura (1985) は、コンピテンスと自己効力の違いについて、「コンピテンスとは、あいまいな、予測しがたい、ストレスとして作用するような要因を含む状況をうまく切り抜けるために、『認知』的な、『社会』的な、そして『行動』的な技能を用いることができるような生産的な能力を意味している。そして、一人一人の人間が、自分自身が持つこのような能力について判断していくときの内容が、自己効力と呼ばれるものなのである。」と説明している。すなわち、コンピテンスは、能力や資質自体を指すのに対し、自己効力は、自分の能力に対する判断の内容を指すという違いがあるということである。

また、自己効力は、自信や有能感に似た面もあるが、この点について、祐宗ら (1985) は、「自信や有能感はいまとりかかろうとする一つの行動についての予期ではなく、もっと一般化され抽象化された自己の妥当性、環境統制力に関する概念であろう。それに対して、自己効力は、『いま、そのことが自分にできるかどうか』というような具体的な一つ一つの行為の遂行可能性の予測に関するものであり、行動に直結した概念である。」と述べている。つまり、基本的に、自己効力は、ある特定の行動や状況に結び付いた、課題特異的な (task-specific) 概念であることが、自信や有能感との相違点と言える。

ただし、この違いは厳密なものではない。Bandura (1977) は、自己効力の次元の一つに「一般性」を挙げており、坂野ら (2002) は、この次元を「ある状況における特定の行動に対して形成されたセルフ・エフィカシーが、場面や状況、行動を超えてどの程度まで般化するかという次元である」と説明している。そうした意味では、広く一般化した自己効力は、自信や有能感に近いものと考えられる。また、前述のコンピテンスにしても、Harter (1982) が唱える「認知されたコンピテンス (perceived competence)」という概念については、一般化した自己効力との間に大きな違いはないと考えられる。

自己効力の次元の一つに、「一般性」があると述べたが、この次元には、特定の課題

や場面に影響を及ぼす自己効力（SSE：task Specific Self-Efficacy）と、より一般的に行動に影響する自己効力の二つの水準が想定されることが多い。

後者は、「一般性自己効力」（GSE：Generalized Self-Efficacy）と呼ばれている（人格特性的な認知傾向と見なせることから、特性的自己効力と呼ばれることもあるが、本研究では、以降、一般性自己効力とする。）。この一般性自己効力は、より長期的に行動に影響することが想定されており、行動の選択、耐性、努力量を通じて遂行に影響を与え、自己効力が高いほど、逆境にも高い耐性を示すとされている（Bandura, 1977）。

ここまで、自己効力理論を、類似した概念との関係を含めて説明してきたが、本研究では、少年院在院者の自己効力と結果予期を、在院期間ごとに測定して、その変化を見ることが第一の目的である。自己効力理論に沿って少年院の教育を考えると、非行少年が更生に向けた行動を実際に遂行できるようになるためには、更生への具体的な行動を教えて理解させる（結果予期を高める）ことと、実際にその行動を行えるという確信を高める（自己効力を高める）ことが必要になると考えられる。少年院における従来からの各種の教育が、結果予期を高める効果を持つことは十分に予想できるが、一方、自己効力を向上させる方法については、どのような働き掛けが効果的であるのか、十分に明らかにされているとは言えない。

自己効力の研究分野では、自己効力を変化させる要因を「情報源」と呼んでおり、一般的に、遂行行動の達成（performance accomplishments）、代理経験（vicarious experiences）、言語的説得（verbal persuasion）、及び生理的状態・情動喚起（emotional arousal）の四つが考えられている（祐宗ら, 1985）。このような文脈から、少年院において、どのような情報源が自己効力の変化に大きく影響しているのかを調べることも研究の目的の一つである。このことは、自己効力を向上させるために、どのような処遇が有効であるかを検討することにつながると考えられる。

また、従来の自己効力に関する研究では、社会的に問題とされるような行動の自己効力については、あまり注目されていなかったと言える。ただし、この点については、これまでの非行・犯罪理論を、無力感、効力感という観点からレビューした岡本（1997）が、非行を、単に不適応状態における憂さ晴らし的な行動と見ることの限界を指摘するとともに、非行を行うことによって有能感を得ていることに着目することの有効性を主張している。岡本（1998）は、少年鑑別所中での非行少年に対して質問紙調査を行い、非行と仕事について、それぞれ自己効力と結果予期を測定している。こうした試みは、まだ十分に実績を積み重ねているとは言えないが、本研究では、非行の自己効力が、少年院在院中に変化するのか、変化する場合、他の自己効力（仕事、対人関係等）の変化との関連が見られるのか、といった点についても検討したい。

## Ⅱ 目的

少年院における効果的な教育や成績評価に資する知見を得るという観点から、少年院在院者の自己効力の変化を調査することを目的とする。

このために、一般性自己効力、仕事や非行等についての自己効力、結果予期を調査し、これらの関連について検討する。また、どのような働き掛けが少年院における自己効力の変化に影響するのか（情報源）を調査する。

## Ⅲ 方法

### 1 横断的調査と縦断的調査

本研究では、少年院在院者の自己効力の変化をとらえる方法として、横断的調査（ある時点において、異なる教育過程にある別々の対象者に対して行う調査）と、縦断的調査（教育過程を追って同一対象者に対して複数回行う調査）の2種類を採用した。変化を詳細に検討するためには、全ての対象者に縦断的調査を実施することが理想であるが、現実にはそうした調査を実施することは困難であるので、大規模な横断的調査のデータによって全体的な傾向を把握するとともに、縦断的調査のデータにより変化のパターンを詳細に検討するという形を採ることとした。このような調査方法を採用したことから、本研究の調査期間は、2年間となっている。今回の研究（その1）では、横断的調査の結果を報告し、次年度に報告予定の「(その2)」において、縦断的調査の結果の報告と、総合的な考察を行う予定である。

今回は、横断的調査の結果を報告するので、「方法」に関しても、横断的調査についてのみ記載し、縦断的調査の研究方法については、「(その2)」において記載することとする。

### 2 調査期間

調査期間は、平成15年10月から同年12月末まで

なお、調査実施日は、各施設で設定しているため、施設ごとに異なっている。

### 3 調査方法

#### (1) 調査対象施設

調査対象施設は、以下の40の少年院である。その内訳は、短期処遇を実施する少年院7施設、長期処遇を実施する少年院33施設である。

## ア 短期処遇

月形，水府，有明，駿府，豊ヶ岡，播磨，佐世保

## イ 長期処遇

帯広，北海，紫明，青森，盛岡，青葉，茨城農芸，赤城，榛名，八街，愛光，久里浜，神奈川医療，新潟，愛知，宮川医療，宇治，浪速，交野，加古川，奈良，岡山，広島，貴船原，丸亀，四国，筑紫，福岡，人吉農芸，中津，大分，沖縄，沖縄女子

## (2) 調査対象者

各施設が指定した調査日（調査票が各施設に到着してから，12月末までの間）に在院している少年を調査対象とした。したがって，対象者数は各施設によって異なる。

短期処遇・長期処遇併設の施設においては，長期処遇者のみを，短期処遇施設においては，特修短期処遇者を除外し，一般短期処遇の者のみを対象としている。

回収した調査票総数は3,108であった。そのうち回答に不備がない2,632名分を有効回答として，分析の対象とした（有効回答率：84.7%）。性別では，男子2,360名，女子272名であり，平均年齢は全体で17.6歳，短期処遇の平均年齢は16.9歳，長期処遇の平均年齢は17.7歳であった。処遇課程別では，短期処遇250名，長期処遇2,382名，教育過程別では，新入時教育過程（以下，「新入時」とする。）498名，中間期教育過程（以下，「中間期」とする。）1,516名，出院準備教育過程（以下，「出院期」とする。）618名であった（資料1を参照）。

その他の調査対象者の属性は，資料1にまとめて示す。全体的な傾向としては，これまでの当所での各種研究結果との間に，大きな違いは見られなかった。

## (3) 調査票

ア 職員調査票（横断用）

イ 少年用調査票Ⅰ（新入期）

ウ 少年用調査票Ⅱ（中間期）

エ 少年用調査票Ⅲ（出院期）

調査票の詳細については，資料2及び3を参照されたい。

なお，短期処遇課程の収容期間は，約半年と短いため，調査票の「ウ」は実施していない。

おって，資料2には，「ア 職員用調査票（横断用）」，資料3には，「エ 少年用調査票Ⅲ（出院期）」を載せている。「ウ」については，「エ」とほとんど同じであり，また，「イ」に関しても，「エ」から一部の質問項目を除いたものになっている。

## (4) 調査方法

#### ア 短期処遇施設

平成15年10月、11月の入院者に少年用調査票Ⅰを、また、入院後4か月以上経過している者に少年用調査票Ⅱを実施した。

#### イ 長期処遇施設

平成15年10月から11月までの間に新入時にある者に少年用調査票Ⅰを、同期間中、中間期にある者に少年用調査票Ⅱを、出院期にある者に少年用調査票Ⅲを実施した。

## 4 調査内容

### (1) 属性調査（職員用調査票）

- ① 性別
- ② 入院時年齢
- ③ 少年院入院回数
- ④ 知能 SS
- ⑤ 少年院入院時の非行名
- ⑥ 現在の少年院種別と分類級
- ⑦ 最終学歴
- ⑧ 保護者
- ⑨ 職業補導種目
- ⑩ 資格・免許
- ⑪ 成績
- ⑫ 問題群別指導科目
- ⑬ 懲戒回数
- ⑭ 賞回数

### (2) 自己効力及び結果予期に関する調査（少年用調査票）

#### ① 一般性自己効力（GSE）

坂野他（1986）の「一般性セルフ・エフィカシー尺度」（16項目）を用い、「あてはまる」、「すこしあてはまる」、「あまりあてはまらない」、「あてはまらない」の4件法で回答させた。

#### ② 対人関係に対する自己効力（対人的自己効力：対人 SE）

対人場面において、どのくらい相手とうまく関係を築いていけるかという期待や信念である。

松島（2001）が作成した「対人自己効力感尺度」40項目のうち、因子分析における因子負荷量が大きかった17項目を採用した。GSEと同様の4件法で回答させた。

## ③ 仕事に対する自己効力（仕事 SE）

仕事をどのくらいうまくやっていけるかという期待や信念である。

岡本（1998）の仕事に対する自己効力尺度の4項目を用い、4件法で回答させた。

## ④ 仕事に対する結果予期

岡本（1998）の16項目を用いて、4件法で回答させた。内容的には、親からの肯定、親からの否定の回避、仲間からの肯定、仲間からの否定の回避という4種類に分かれる。

## ⑤ 非行に対する自己効力（非行的自己効力：非行 SE）

非行場面において、どのくらいうまく行動できるかという期待や信念である。

近藤ら（1997）が作成したスポーツにおける自己効力尺度（45項目）の因子分析から得られた因子のうち、非行の自己効力の測定に用いることができると思われる「運動に対する有能感」、「メンバーとの関係」、「緊張性・失敗不安」の3因子に因子負荷量の高い11項目を選び、その質問項目の語句をスポーツに関するものから非行に変え、非行的自己効力感（非行 SE）尺度を作成したものである。回答は、4件法である。

## ⑥ 非行の結果予期

岡本（1998）の仕事の結果予期を参考に、親からの肯定、親からの否定の回避、仲間からの肯定、仲間からの否定の回避という4項目を作成し、4件法で回答させた。

## ⑦ 出院後の結果予期

仕事の継続、交友関係の維持、職場や家庭での対人関係の維持、本件非行の予防、本件非行以外の再非行の予防という5項目のそれぞれについて、それを実現するための方法を具体的に知っているかを、4件法で回答させた。

## ⑧ 少年院内での自己効力の変化と変化の理由（情報源）

これは、中間期及び出院期の対象者に対して（短期処遇は出院期のみ）実施した。仕事の継続、交友関係の維持、職場や家庭での対人関係の維持、本件非行の予防、本件非行以外の再非行の予防のそれぞれについて、入院時と比較した場合の現在の自信を、中央を入院時として、「すごく自信をなくした」から「すごく自信がついた」までの11段階で評定させた。

なお、その際、回答者に分かりやすく伝えるために、「どの程度、自信がつかまりましたか」という形で質問している。最初に述べたように、厳密には自己効力と自信は異なるという意見はあるものの、一般性自己効力のように、長期間にわたってその人の行動に影響を与えるものについては、自信に近いものと考えられることから、このような質問が、全く不適當であるとは考えられない。

さらに、自信の変化に最も影響を及ぼした情報源を一つ選択させている。情報源については、先に挙げた「遂行行動の達成」、「代理経験」、「言語的説得」、及び「生理的状態・情動喚起」の四つがあると言われているが、本研究では、少年院において各情報源に該当すると思われる項目を八つ挙げている。

## IV 結果

各種属性の集計結果については、資料1を参照されたい。

### 1 自己効力について

教育過程と短期処遇・長期処遇の処遇課程別を基軸として分析を行った。

#### (1) 一般性自己効力 (GSE) について

##### ア 一般性自己効力 (GSE) の下位尺度の構成

一般性自己効力尺度の16項目について、「あてはまる」、「すこしあてはまる」、「あまりあてはまらない」、「あてはまらない」の回答を、4点から1点で得点化し、因子分析（主因子法・バリマックス回転）を行った。

その結果、3因子を抽出した。因子の解釈及び命名は、因子負荷量0.40以上であった12項目を中心に行った。表1は、この12項目を各因子別にまとめたもので

表1 GSEの各因子と項目内容

因子	項目No.	項目内容	負荷量
失敗に対する不安	2	過去に犯した失敗や嫌な経験を思い出して、暗い気持ちになることがよくある。	.54
	4	仕事を終えた後、失敗したと感じることのほうが多い。	.42
	5	人と比べて心配性なほうである。	.66
	7	何かをするとき、うまくゆかないのではないかと不安になることが多い。	.63
	14	小さな失敗でも人よりずっと気にするほうである。	.71
行動の積極性	1	何か仕事をするときは、自信を持ってやるほうである。	.54
	10	結果の見通しがつかない仕事でも、積極的に取り組んでゆくほうだと思う。	.60
	13	どんなことでも積極的にこなすほうである。	.78
	15	積極的に活動するのは、苦手なほうである。	.62
能力の社会的位置づけ	3	友人より優れた能力がある。	.74
	12	友人よりも特に優れた知識を持っている分野がある。	.70
	16	世の中に貢献できる力があると思う。	.44

ある。第1因子を「失敗に対する不安」、第2因子を「行動の積極性」、第3因子を「能力の社会的位置づけ」と命名し、これら3因子の因子得点を求め、GSE尺度の下位尺度とした。

#### イ GSE尺度について

##### (ア) 教育過程別

短期処遇の各教育過程別（新入時、出院期）に、GSE尺度の下位尺度得点の平均値を算出し、t検定を行った結果を表2、図1に示す。「失敗に対する不安」の平均点が出院期の方が有意に高くなっている（ $t = 2.01, p < .05$ ）。

長期処遇の各教育過程別（新入時、中間期、出院期）にGSE尺度の下位尺度得点の平均値を算出し、一元配置分散分析を行った結果を表3、図2に示す。各因子とも各教育過程間での有意差は見られなかった。

表2 短期処遇における教育過程別のGSE下位尺度のt検定

尺度	新入時		出院期		t 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
失敗に対する不安	-0.24	0.77	-0.04	0.75	-2.01 *
行動の積極性	-0.07	0.79	0.05	0.81	-1.10
能力の社会的位置づけ	-0.05	0.81	0.08	0.85	-1.22

注) \* は5%水準以下で有意であることを示す。

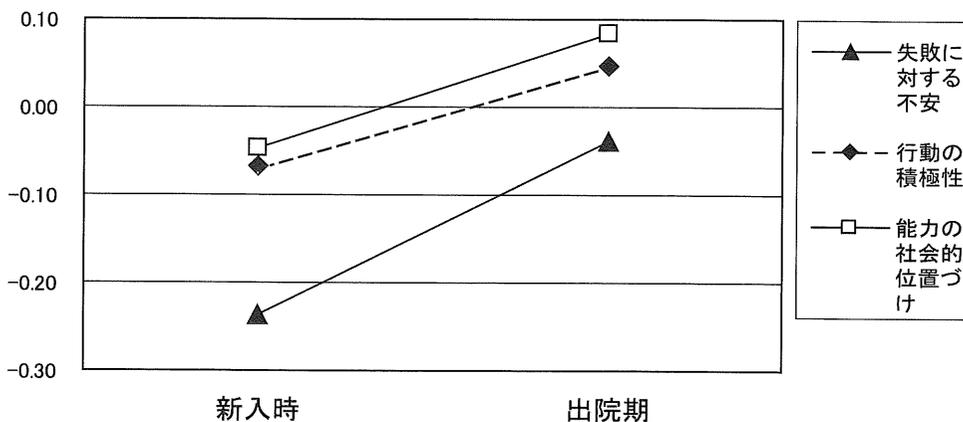


図1 短期処遇における教育過程別のGSE下位尺度の平均値

表3 長期処遇における教育過程別の GSE 下位尺度の分散分析

尺度		新入時	中間期	出院期	F 値
失敗に対する不安	度数	344	1,516	522	F(2, 2379) = 0.63
	平均値	0.01	0.03	-0.02	
	標準偏差	0.88	0.89	0.85	
行動の積極性	度数	344	1,516	522	F(2, 2379) = 1.53
	平均値	0.00	-0.02	0.06	
	標準偏差	0.88	0.92	0.93	
能力の社会的位置づけ	度数	344	1,516	522	F(2, 2379) = 2.22
	平均値	-0.08	0.03	-0.03	
	標準偏差	0.87	0.86	0.83	

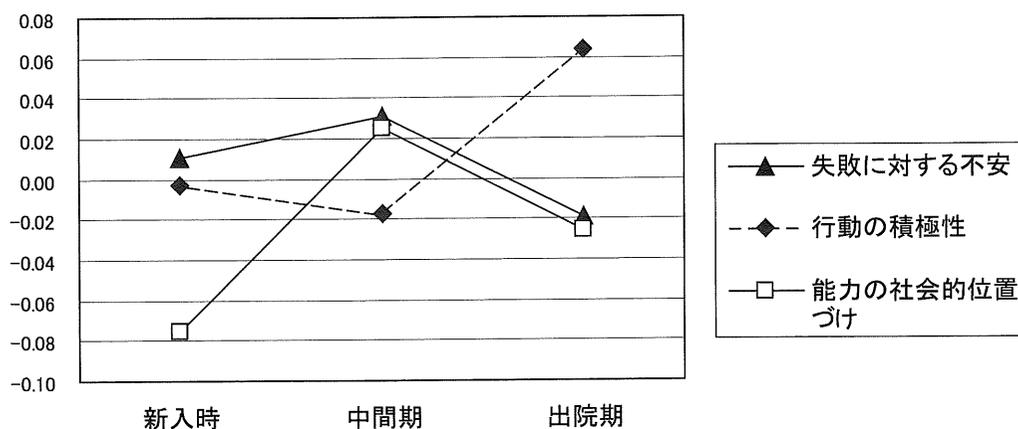


図2 長期処遇における教育過程別の GSE 下位尺度の平均値

## (イ) 短期・長期処遇別

短期・長期処遇別に、GSE 尺度の下位尺度の平均値を算出し、t 検定を行った結果を、表4、図3に示す。「失敗に対する不安」の平均値が長期処遇の方が有意に高くなっている ( $t = 3.08$ ,  $p < .01$ )。

表4 短期・長期処遇別の GSE 下位尺度の t 検定

尺度	短期処遇		長期処遇		t 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
失敗に対する不安	-0.16	0.76	0.17	0.88	-3.08 **
行動の積極性	-0.24	0.79	0.00	0.92	-0.44
能力の社会的位置づけ	0.00	0.83	0.00	0.86	0.06

注) \*\* は 1%水準以下で有意であることを示す。

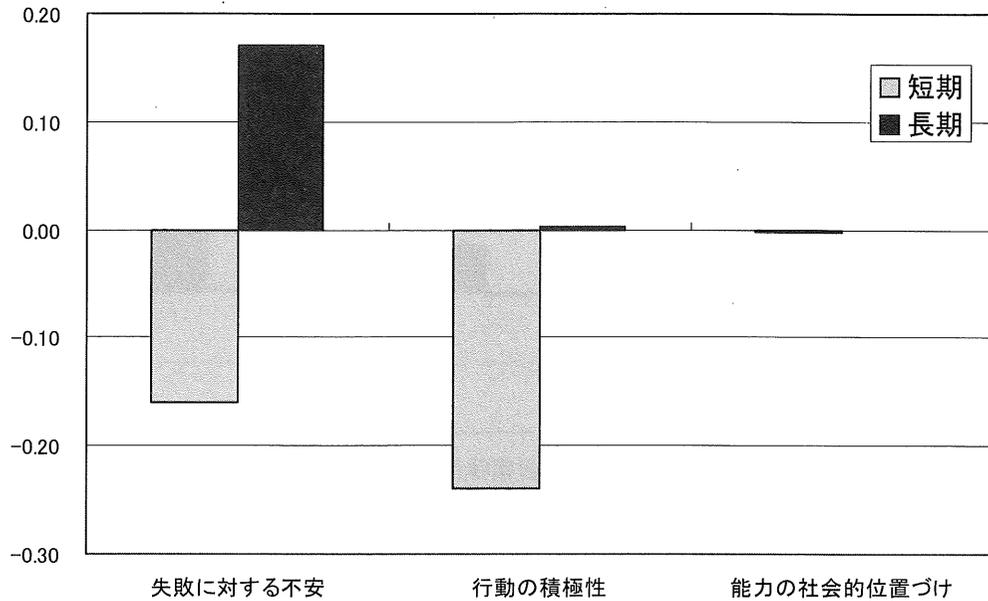


図3 短期・長期処遇別のGSE下位尺度の平均値

## (ウ) 種別

少年院の種別（初等，中等，特別）ごとに，GSE尺度の平均値を算出し，一元配置分散分析を行った結果を表5，図4に示す。「失敗に対する不安」( $F(2, 2629) = 5.78, p < .01$ )，「能力の社会的位置づけ」( $F(2, 2629) = 12.94, p < .01$ )で有意差が見られた。それぞれについてLSD検定による多重比較を

表5 種別別GSE下位尺度の分散分析

尺度		初等	中等	特別	F値・多重比較
失敗に対する不安	度数	396	2,098	138	
	平均値	-0.09	0.00	0.20	$F(2, 2629) = 5.78 **$
	標準偏差	0.84	0.87	0.97	特別 > 初等, 中等
行動の積極性	度数	396	2,098	138	
	平均値	0.00	0.00	0.07	$F(2, 2629) = 0.408$
	標準偏差	0.94	0.90	0.90	
能力の社会的位置づけ	度数	396	2,098	138	
	平均値	-0.13	0.01	0.29	$F(2, 2629) = 12.94 **$
	標準偏差	0.87	0.85	0.85	特別 > 中等 > 初等

注) \*\* は1%水準以下で有意であることを示す。

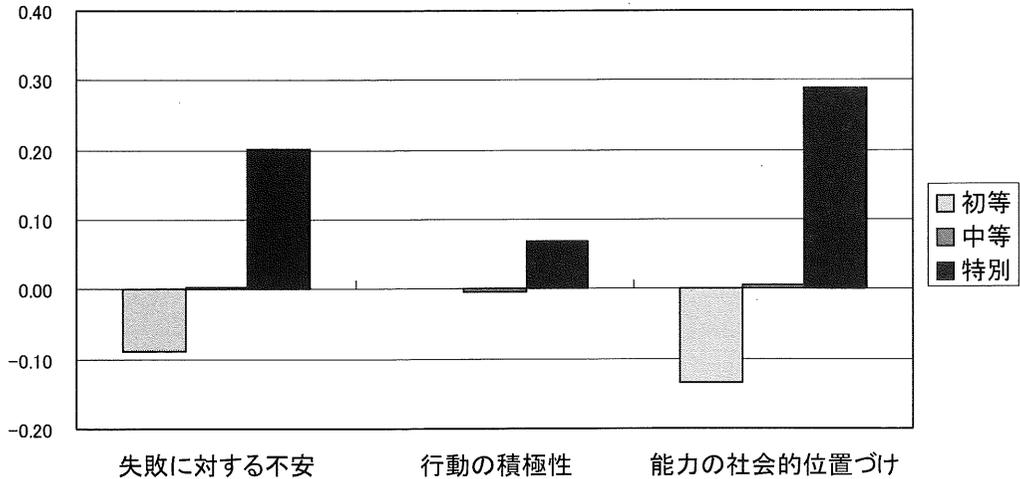


図4 種別別の GSE 下位尺度の平均値

行ったところ、「失敗に対する不安」において、特別が初等及び中等に比べて有意に高く、「能力の社会的位置づけ」においては特別，中等，初等の順に高く，すべての間に有意差が認められた。

(エ) 性別

性別で、GSE 尺度の下位尺度の平均値を算出し、t 検定を行った結果を表 6、図 5 に示す。「失敗に対する不安」( $t = 2.03, p < .05$ )、「能力の社会的位置づけ」( $t = 2.45, p < .05$ ) の平均値が男子の方が有意に高かった。

(オ) 年齢

18歳以上、18歳未満の2群に分けて、GSE 尺度の下位尺度の平均値を算出し、t 検定を行った結果を表 7、図 6 に示す。18歳で区切ったのは、両群の人員を同数に近づけるためである。「能力の社会的位置づけ」の平均値は、18歳以上の方が有意に高くなっている ( $t = 3.73, p < .01$ )。

表 6 性別の GSE 下位尺度の t 検定

尺 度	男子		女子		t 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
失敗に対する不安	0.12	0.87	-0.10	0.87	2.03 *
行動の積極性	0.00	0.90	0.04	0.92	-0.82
能力の社会的位置づけ	0.01	0.85	-0.12	0.85	2.45 *

注) \* は 5%水準以下で有意であることを示す。

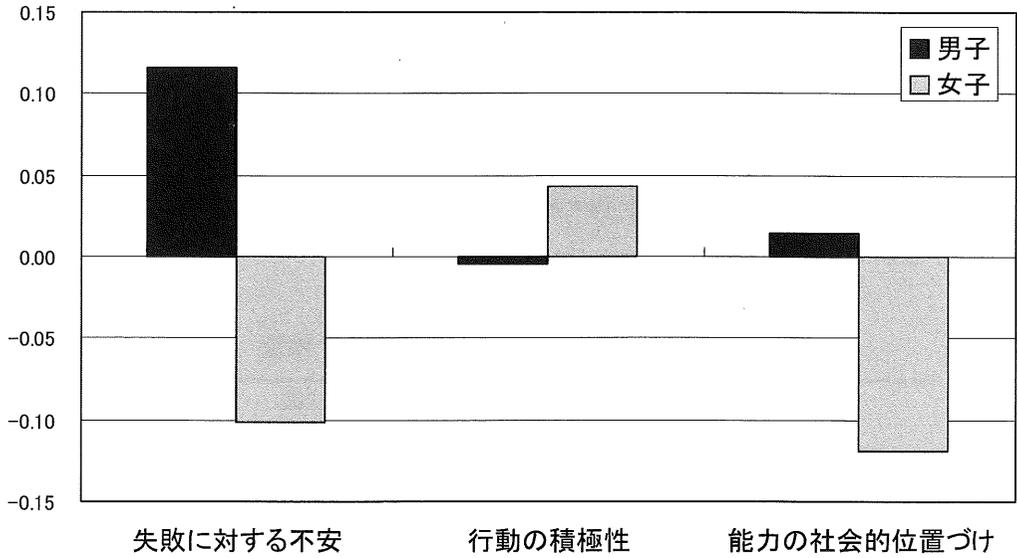


図5 性別の GSE 下位尺度の平均値

表7 年齢別の GSE 下位尺度の t 検定

尺度	18歳以上		18歳未満		t 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
失敗に対する不安	0.03	0.89	-0.03	0.85	1.81
行動の積極性	0.03	0.91	-0.03	0.91	1.69
能力の社会的位置づけ	0.06	0.85	-0.07	0.85	3.73 **

注) \*\* は 1%水準以下で有意であることを示す。

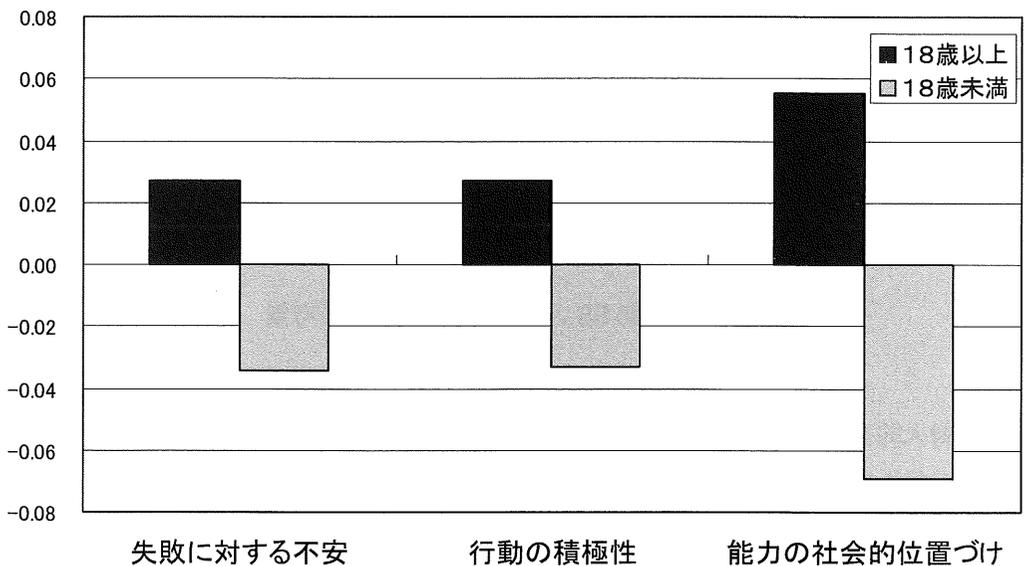


図6 年齢別の GSE 下位尺度の平均値

## (カ) 知能 SS

知能 SS を40以上、40未満の2群に分けて、GSE尺度の下位尺度の平均値を算出し、t検定を行った結果を表8、図7に示す。SS40で区切ったのは、両群の人員を同数に近づけるためである。「行動の積極性」( $t = 2.97, p < .01$ )、「能力の社会的位置づけ」( $t = 8.57, p < .01$ )の平均値は、SS40以上の方が有意に高くなっている。

表8 知能 SS 別の GSE 下位尺度の t 検定

尺 度	SS 40以上		SS 40未満		t 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
失敗に対する不安	0.02	0.87	-0.03	0.87	1.72
行動の積極性	0.04	0.91	-0.06	0.89	2.97 **
能力の社会的位置づけ	0.12	0.86	-0.16	0.82	8.57 **

注) \*\* は 1%水準以下で有意であることを示す。

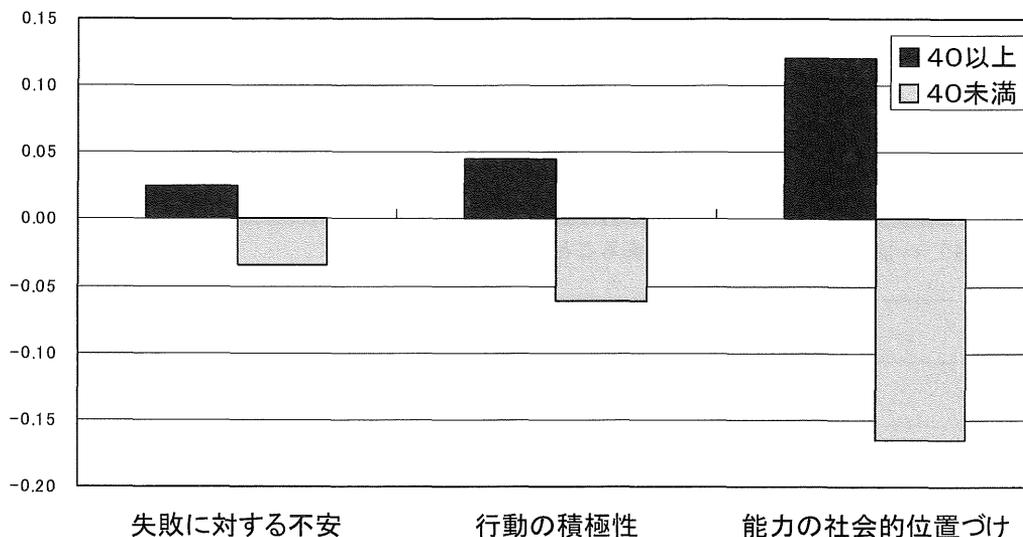


図7 知能別 SS の GSE 下位尺度の平均値

## (2) 対人的自己効力について

## ア 対人的自己効力感 (対人 SE) の下位尺度の構成

各項目の4件法の回答(「あてはまる」、「すこしあてはまる」、「あまりあてはまらない」、「あてはまらない」)を、それぞれ4点から1点で得点化し、因子分析(主因子法・バリマックス回転)を行い、4因子を抽出した。

GSE の下位尺度の構成と同様の方法により、第1因子を「友人への信頼・安定感」、第2因子を「友人からの信頼」、第3因子を「対人スキルの自信」、第4因子を「肯定的自己評価」と命名した。また、因子得点を算出し、これら4因子を対人SEの下位尺度とした（表9）。

表9 対人的自己効力の各因子と項目内容

因子	項目No.	項目内容	負荷量
友人への信頼・安定感	7	私には心から信頼できる友人がいる。	.58
	10	困ったときは、友人に相談しようと思う。	.73
	11	私にとっての友人は頼りになるものだと思う。	.85
	12	友人と元気を分かち合うことができると思う。	.68
	17	私は友だちといることが好きである。	.54
友人からの信頼	1	友人はいつも私のことをわかってくれていると思う。	.60
	2	友人に何を話してもわかってくれていると思う。	.57
	3	私が友人を誘えば一緒に行動してくれると思う。	.48
	4	私は友人に信頼されている。	.72
	5	友人は私のことを嫌いにならないと思う。	.61
対人スキルの自信	9	友人は自分を必要としてくれている。	.62
	6	私は誰とでも気軽に話せる。	.73
	8	私は人にして欲しいことをきちんと説明できる。	.42
肯定的自己評価	13	初めてあう人にでもうまく自己紹介ができる。	.74
	14	私は自分で自分をほめることができる。	.70
	15	私は今自分に満足している。	.44

## イ 対人SE尺度について

### (ア) 教育過程別

短期処遇の各教育過程別（新入時，出院期）に，対人SE尺度の下位尺度得点の平均値を算出し，t検定を行った結果を表10，図8に示す。各因子とも，教育過程間での有意差は見られなかった。

長期処遇の各教育過程別（新入時，中間期，出院期）に，対人SE尺度の下位尺度得点の平均値を算出し，一元配置分散分析を行った結果を表11，図9に示す。「友人への信頼・安定感」( $F(2, 2379) = 4.28, p < .05$ )，「友人からの信頼」( $F(2, 2379) = 7.30, p < .01$ )，「肯定的自己評価」( $F(2, 2379) = 3.77, p < .05$ )で有意な主効果が認められた。それぞれについてLSD検定による多重比較を行ったところ，「友人への信頼・安定感」では，新入時が中間期及び出院期に比べて有意に高く，「友人からの信頼」では，新入時，中間期，出院期の順で有意に高く，「肯定的自己評価」では，新入時が出院期に比べて有意に高くなっている。

表10 短期処遇における教育過程別の対人 SE 下位尺度の t 検定

尺度	新入時		出院期		t 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
友人への信頼・安定感	0.09	0.84	-0.12	0.93	1.86
友人からの信頼	0.11	0.89	-0.10	0.86	1.85
対人的スキルの自信	-0.06	0.84	0.14	0.92	-1.79
肯定的自己評価	-0.14	0.61	-0.08	0.64	-0.74

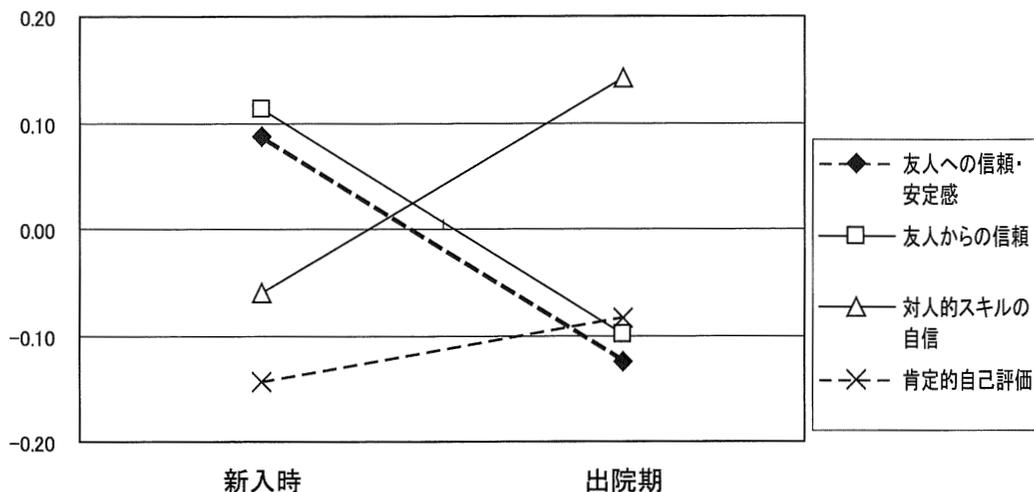


図8 短期処遇における教育過程別の対人 SE 下位尺度の平均値

表11 長期処遇における教育過程別の対人 SE 下位尺度の分散分析

尺度		新入時	中間期	出院期	F 値
友人への信頼・安定感	度数	344	1,516	522	
	平均値	0.14	-0.02	-0.04	F(2, 2379) = 4.28 *
	標準偏差	0.86	0.97	0.94	新入 > 中間, 出院
友人からの信頼	度数	344	1,516	522	
	平均値	0.14	0.00	-0.10	F(2, 2379) = 7.30 **
	標準偏差	0.89	0.97	0.87	新入 > 中間 > 出院
対人的スキルの自信	度数	344	1,516	522	
	平均値	-0.04	0.02	-0.03	F(2, 2379) = 0.84
	標準偏差	0.90	0.93	0.88	
肯定的自己評価	度数	344	1,516	522	
	平均値	-0.07	0.02	0.06	F(2, 2379) = 3.77 *
	標準偏差	0.71	0.73	0.69	新入 > 出院

注) \*\* は 1%水準以下で, \* は 5%水準以下で有意であることを示す。

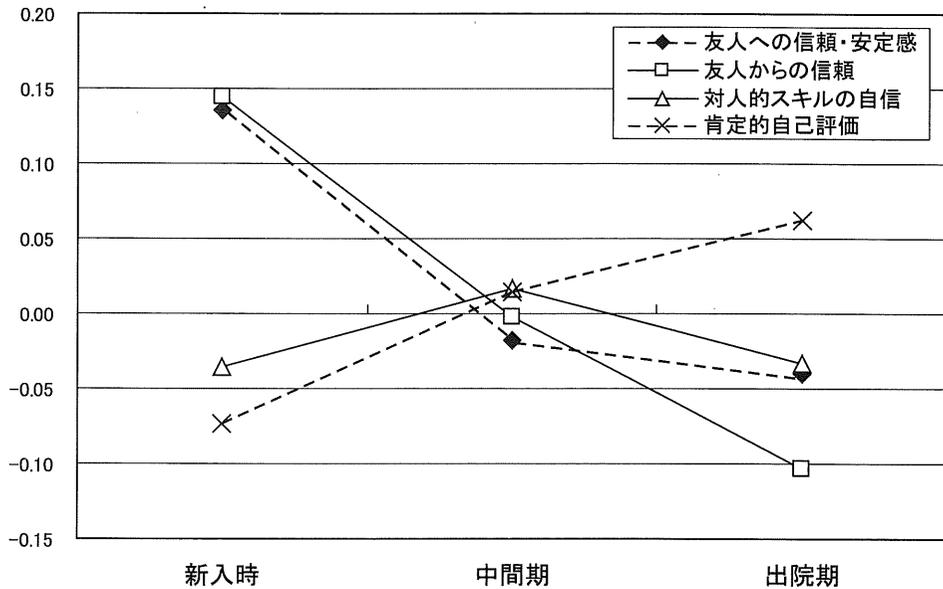


図9 長期処遇における教育過程別の対人SE下位尺度の平均値

(イ) 短期・長期処遇別

短期・長期処遇別に、対人SE尺度の下位尺度の平均値を算出し、t検定を行った結果を表12、図10に示す。「肯定的自己評価」の平均値が長期処遇の方が有意に高くなっている ( $t = 2.84, p < .01$ )。

(ウ) 種別

少年院種別（初等，中等，特別）ごとに、対人SE尺度の平均値を算出し、一元配置分散分析を行った結果を表13、図11に示す。「友人への信頼・安定感」の主効果が有意であった ( $F(2, 2629) = 4.43, p < .05$ )。LSD検定による多重比較を行ったところ、初等及び中等は、特別に比べて有意に得点が高くなっていることが分かった。

表12 短期・長期処遇別の対人SE下位尺度のt検定

尺 度	短期処遇		長期処遇		t 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
友人への信頼・安定感	0.01	0.88	0.00	0.95	0.11
友人からの信頼	0.03	0.88	0.00	0.94	0.56
対人的スキルの自信	0.02	0.87	0.00	0.91	0.32
肯定的自己評価	-0.12	0.01	0.13	0.72	-2.84 *

注) \* は5%水準以下で有意であることを示す。

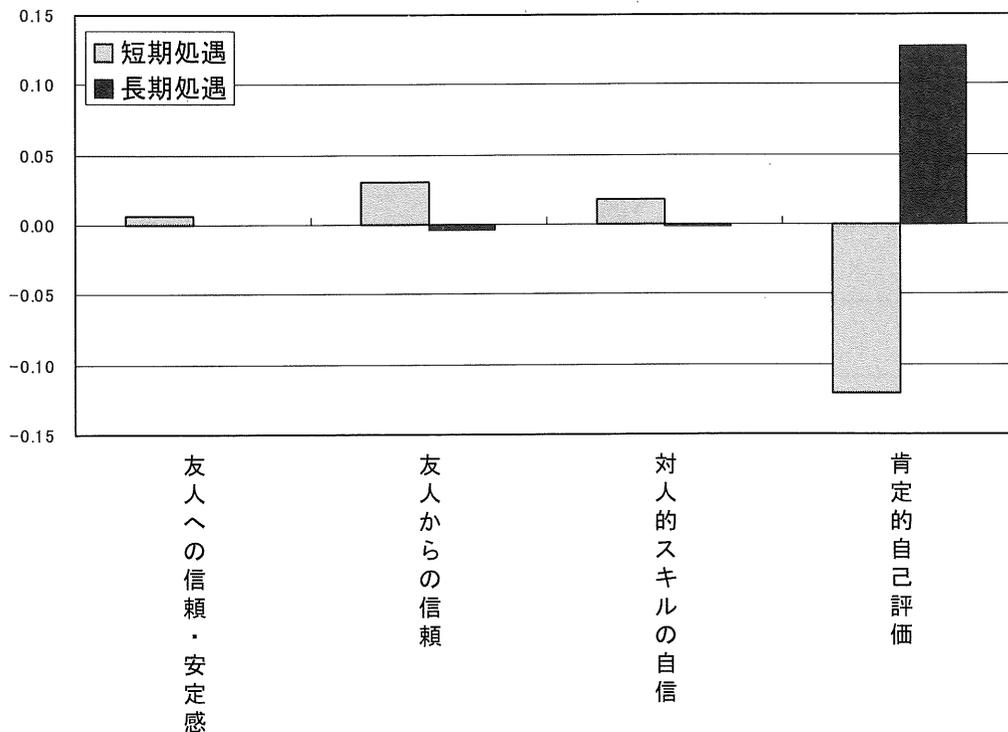


図10 短期・長期処遇別の対人 SE 下位尺度の平均値

表13 種別別の対人 SE 下位尺度の分散分析

尺度		初等	中等	特別	F 値
友人への信頼・安定感	度数	396	2,098	138	
	平均値	0.02	0.01	-0.23	F(2, 2629) = 4.43 *
	標準偏差	0.95	0.93	1.06	初等, 中等 > 特別
友人からの信頼	度数	396	2,098	138	
	平均値	0.08	-0.01	-0.12	F(2, 2629) = 2.55
	標準偏差	1.00	0.92	0.99	
対人的スキルの自信	度数	396	2,098	138	
	平均値	-0.02	-0.01	0.17	F(2, 2629) = 2.71
	標準偏差	0.94	0.90	0.94	
肯定的自己評価	度数	396	2,098	138	
	平均値	-0.06	0.01	0.09	F(2, 2629) = 2.84
	標準偏差	0.71	0.71	0.74	

注) \* は 5%水準以下で有意であることを示す。

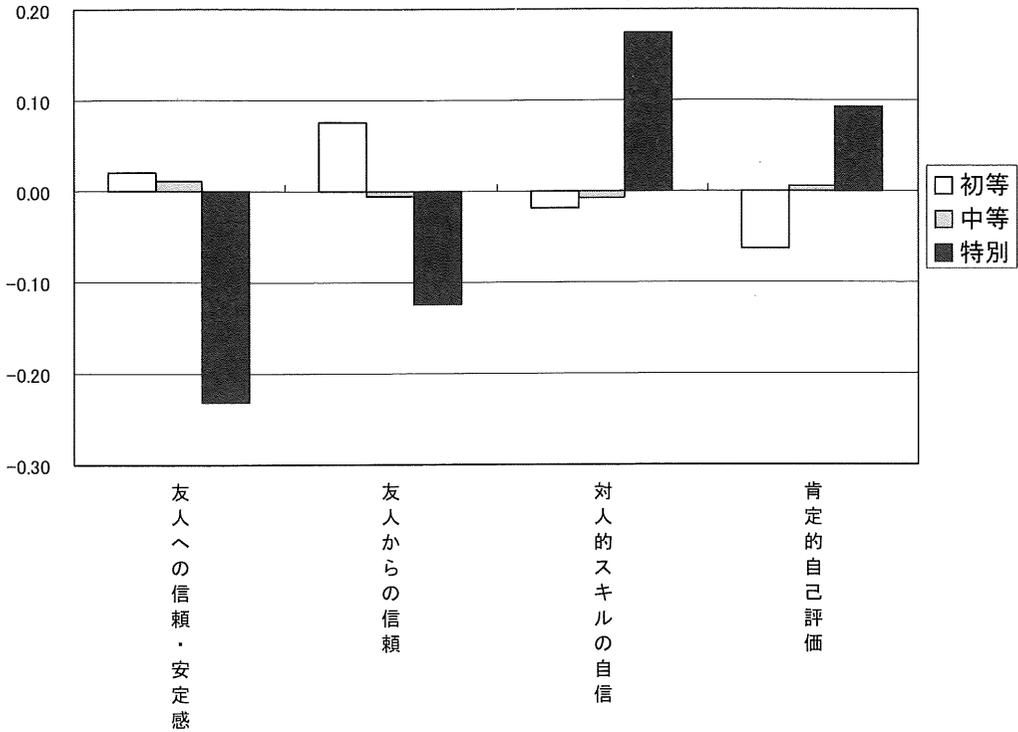


図11 種別別の対人 SE 下位尺度の平均値

(エ) 性別

性別に、対人 SE 尺度の下位尺度の平均値を算出し、t 検定を行った結果を表14、図12に示す。「肯定的自己評価」の平均値は、女子が男子に比べて有意に高くなっている ( $t = 2.11, p < .05$ )。

表14 性別の対人 SE 下位尺度の t 検定

尺度	男子		女子		t 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
友人への信頼・安定感	0.01	0.94	-0.01	0.98	0.94
友人からの信頼	0.00	0.93	-0.03	0.98	0.50
対人的スキルの自信	0.00	0.91	0.03	0.93	-0.48
肯定的自己評価	-0.01	0.70	0.09	0.79	-2.11 *

注) \* は 5%水準以下で有意であることを示す。

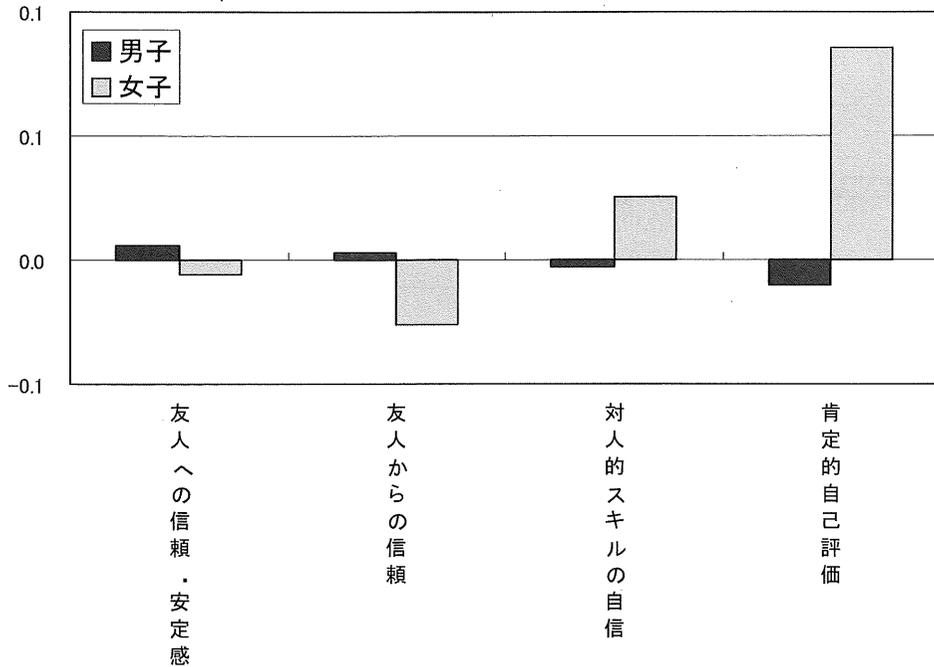


図12 性別の対人 SE 下位尺度の平均値

## (オ) 年齢

年齢を18歳以上，18未満の2群に分けて，対人 SE 尺度の下位尺度の平均値を算出し，t 検定を行った結果を表15，図13に示す。「友人への信頼・安定感」，「友人からの信頼」の平均値は，18歳未満の方が有意に高く ( $t = 2.90$ ,  $p < .01$ ),  $t = 3.19$ ,  $p < .01$ ), 「肯定的自己評価」の平均値は，18歳以上の方が有意に高くなっている ( $t = 3.20$ ,  $p < .01$ )。

表15 年齢別の対人 SE 下位尺度の t 検定

尺度	18歳以上		18歳未満		t 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
友人への信頼・安定感	-0.05	0.96	0.06	0.92	-2.90 **
友人からの信頼	-0.05	0.93	0.06	0.93	-3.19 **
対人的スキルの自信	0.01	0.91	-0.01	0.91	0.45
肯定的自己評価	0.04	0.72	-0.05	0.70	3.20 **

注) \*\* は 1%水準以下で有意であることを示す。

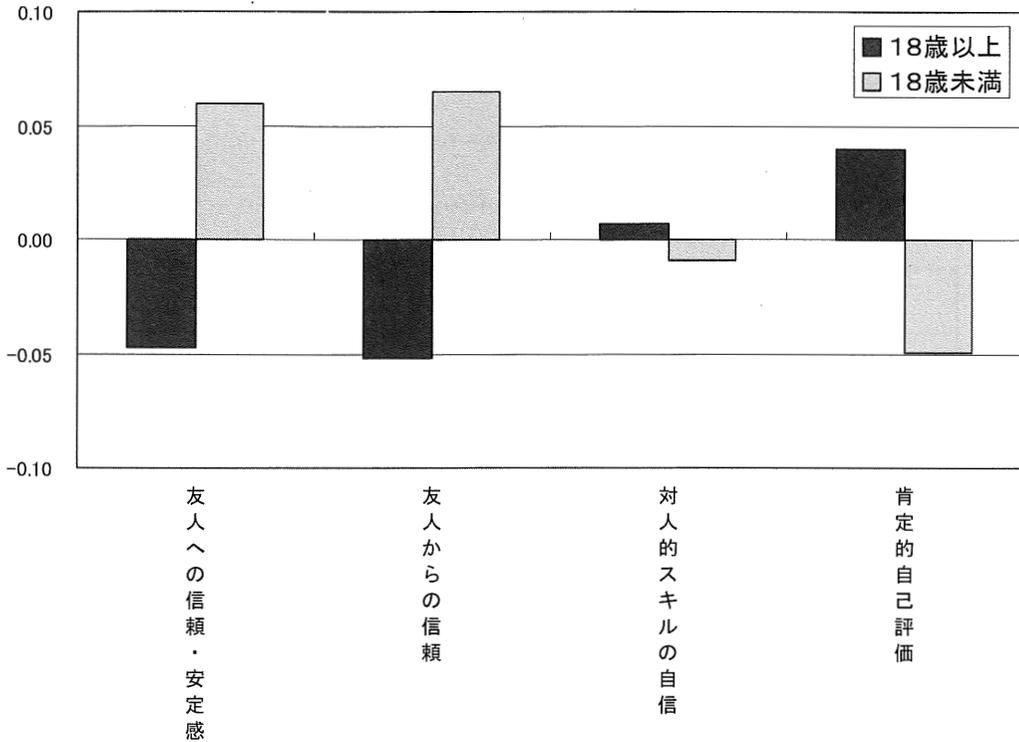


図13 年齢別の対人 SE 下位尺度の平均値

(カ) 知能 SS

知能 SS を40以上，40未満の2群に分けて，対人 SE 尺度の下位尺度の平均値を算出し，t 検定を行った結果を表16，図14に示す。「友人への信頼・安定感」の平均値は，SS 40以上の方が有意に高くなっている ( $t = 2.32, p < .01$ )。

表16 知能 SS 別の対人 SE 下位尺度の t 検定

尺度	SS 40以上		SS 40未満		t 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
友人への信頼・安定感	0.04	0.93	-0.05	0.96	2.32 *
友人からの信頼	0.02	0.94	-0.03	0.93	1.49
対人的スキルの自信	-0.01	0.92	0.01	0.90	-0.53
肯定的自己評価	0.01	0.71	-0.02	0.71	1.26

注) \* は5%水準以下で有意であることを示す。

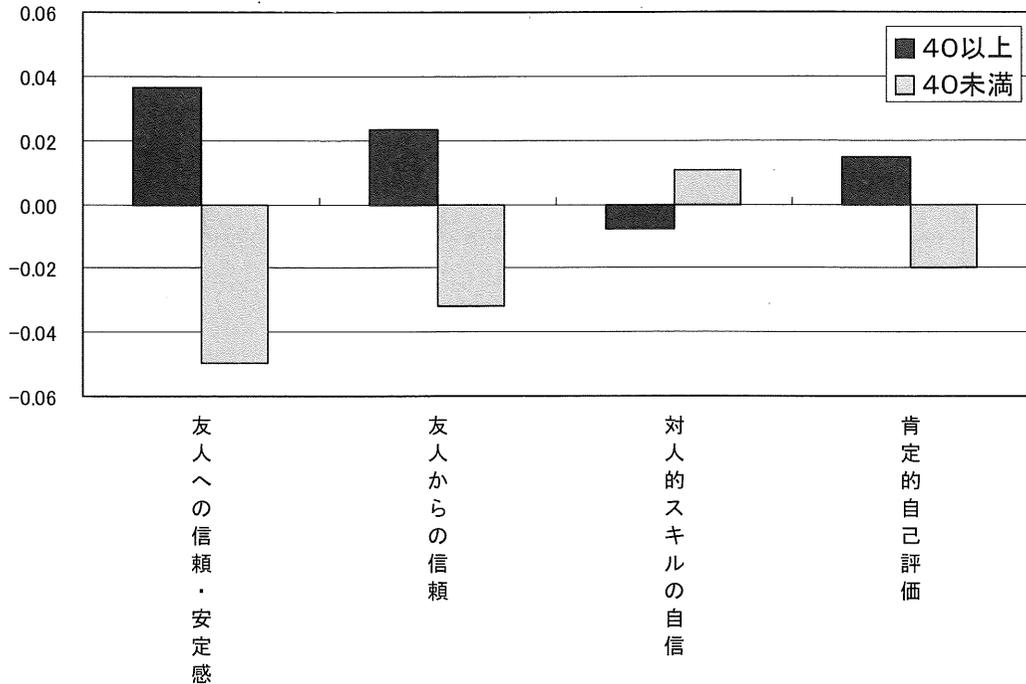


図14 知能 SS 別の対人 SE 下位尺度の平均

### (3) 非行的自己効力について

#### ア 非行的自己効力（非行 SE）の構成

各項目の4件法の回答（「あてはまる」、「すこしあてはまる」、「あまりあてはまらない」、「あてはまらない」）を、それぞれ4点から1点で得点化し、因子分析（主因子法・バリマックス回転）を行い、3因子を抽出した。

表17はこの11項目を各因子別にまとめたものであるが、第1因子に負荷の高い項目は「メンバーとの関係」に、第2因子に負荷の高い項目は「非行に対する有能感」に、第3因子に負荷の高い項目は「緊張性・失敗性不安」に関する項目群であった。これら3因子を下位尺度とし、因子得点を算出した。

表17 非行SEの各因子と項目内容

因子	項目No.	項目内容	負荷量
メンバーとの関係	1	非行の楽しい思い出がたくさんある。	.47
	2	非行をしているとき、他の仲間がうまくできるように手助けしてくれた。	.84
	3	非行をしているとき、うまくできる方法を友だちが一緒に考えてくれた。	.83
	4	非行で失敗すると、友だちがもっとがんばれと励ましてくれた。	.51
	5	今まで非行すると、すぐにうまくいくことが多かった。	.42
非行に対する有能感	6	人よりも非行ではうまくできていると思っている。	.79
	10	どんな非行においても自分は素質があると思う。	.69
	11	本件非行とおなじようなことができる自信がある。	.45
緊張性・失敗性不安	7	非行をする前から、失敗したときのことを心配してしまう。	.61
	8	失敗や周りの目が気になるので、あまり非行は好きでない。	.57
	9	非行のとき、緊張しすぎて失敗することがある。	.62

## イ 非行SE尺度との関わり

## (ア) 教育過程別

短期処遇の各教育過程別（新入時、出院期）に非行SE尺度の下位尺度得点の平均値を算出し、t検定を行った結果を表18、図15に示す。「緊張性・失敗性不安」の平均値は、出院期の方が有意に高くなっている ( $t = 2.28, p < .05$ )。

長期処遇の各教育過程別（新入時、中間期、出院期）に非行SE尺度の下位尺度得点の平均値を算出し、一元配置分散分析を行った結果を、表19、図16に示す。「メンバーとの関係」( $F(2, 2379) = 8.06, p < .01$ )、「非行に対する有能感」( $F(2, 2379) = 11.06, p < .01$ )、「緊張性・失敗性不安」( $F(2, 2379) = 3.16, p < .05$ )で有意差が見られた。それぞれについてLSD検定による多重比較を行ったところ、「メンバーとの関係」では、中間期及び出院期が新入時に比べて有意に高く、「非行に対する有能感」では、中間期が新入時及び出院期に比べて有意に高く、「緊張性・失敗性不安」では、中間期が新入時に比べて有意に高くなっている。

表18 短期処遇における教育過程別の非行SE下位尺度のt検定

尺度	新入時		出院期		t値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
メンバーとの関係	-0.12	0.82	-0.02	0.88	-0.90
非行に対する有能感	-0.23	0.77	-0.15	0.90	-0.69
緊張性・失敗性不安	-0.27	0.74	-0.03	0.87	-2.28 *

注) \* は5%水準以下で有意であることを示す。

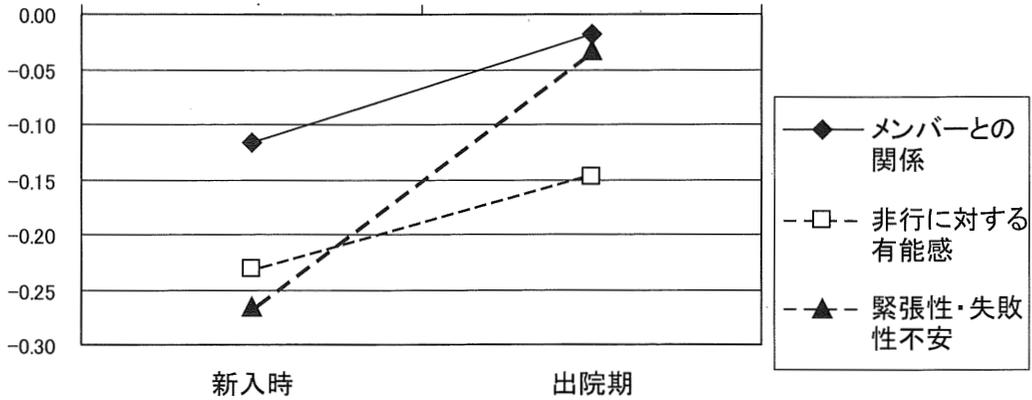


図15 短期処遇における教育過程別の非行 SE 下位尺度の平均値

表19 長期処遇における教育過程別の非行 S E 下位尺度の分散分析

尺度		新入時	中間期	出院期	F 値
メンバーとの関係	度数	344	1,516	522	
	平均値	-0.17	0.05	0.00	F(2, 2379) = 8.06 **
	標準偏差	0.97	0.92	0.95	中間期, 出院期 > 新入時
非行に対する有能感	度数	344	1,516	522	
	平均値	-0.15	0.08	-0.05	F(2, 2379) = 11.06 **
	標準偏差	0.90	0.93	0.90	中間期 > 新入時, 出院期
緊張性・失敗性不安	度数	344	1,516	522	
	平均値	-0.05	0.05	-0.03	F(2, 2379) = 3.16 *
	標準偏差	0.82	0.82	0.78	中間期 > 新入時

注) \*\* は 1%水準以下で, \* は 5%水準以下で有意であることを示す。

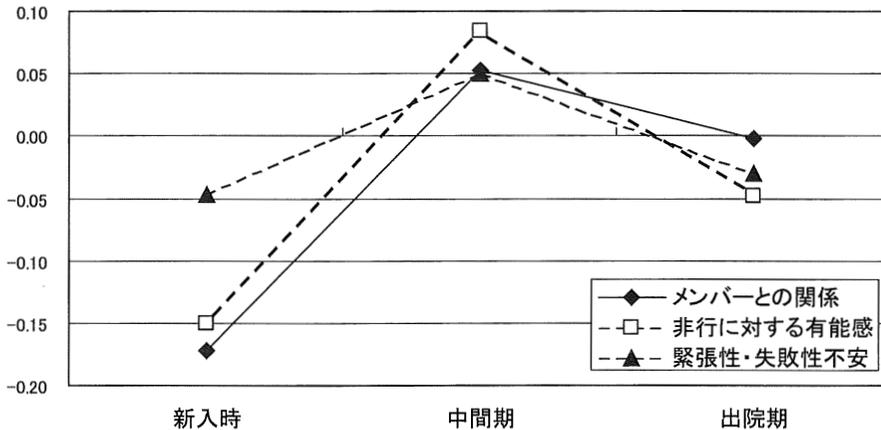


図16 長期処遇における教育過程別の非行 SE 下位尺度の平均値

## (イ) 短期・長期処遇別

短期・長期処遇別に、非行 SE 尺度の下位尺度の平均値を算出し、t 検定を行った結果を、表20、図17に示す。「非行に対する有能感」( $t = 3.70, p < .01$ )、「緊張性・失敗性不安」( $t = 3.60, p < .01$ )の平均値は長期処遇の方が有意に高くなっている。

表20 短期・長期処遇別の非行 SE 下位尺度の t 検定

尺 度	短期処遇		長期処遇		t 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
メンバーとの関係	-0.08	0.84	0.01	0.94	-1.41
非行に対する有能感	-0.20	0.82	0.02	0.92	-3.70 **
緊張性・失敗性不安	-0.18	0.80	0.02	-3.60	-0.18 **

注) \*\* は 1%水準以下で有意であることを示す。

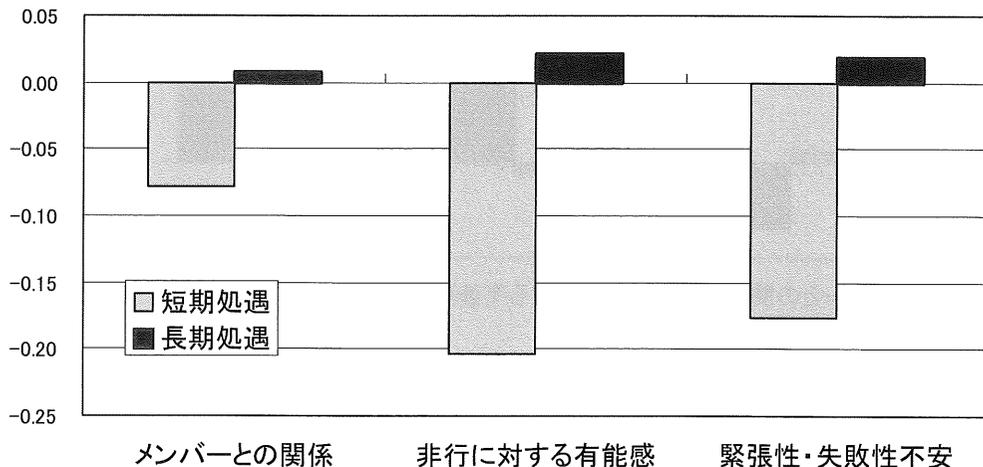


図17 短期・長期処遇別の非行 SE 下位尺度の平均値

## (ウ) 種別

少年院の種別（初等，中等，特別）ごとに、非行 SE 尺度の平均値を算出し、一元配置分散分析を行った結果を、表21、図18に示す。「非行に対する有能感」( $F(2, 2629) = 3.25, p < .05$ )、「緊張性・失敗性不安」( $F(2, 2629) = 7.26, p < .01$ )において、有意な主効果が見られた。それぞれについて LSD 検定による多重比較を行ったところ、「非行に対する有能感」では、特別が中等に比べて有意に得点が高く、「緊張性・失敗性不安」では、特別が初等及び中等に比べて有意に高くなっている。

表21 種別別の非行 SE 下位尺度の分散分析

尺度		初等	中等	特別	F 値
メンバーとの関係	度数	396	2,098	138	F ( 2 , 2629 ) = 1.01
	平均値	-0.04	0.01	-0.07	
	標準偏差	0.94	0.93	0.94	
非行に対する有能感	度数	396	2,098	138	F ( 2 , 2629 ) = 3.25 * 特別 > 中等
	平均値	0.01	-0.02	0.19	
	標準偏差	0.95	0.90	1.00	
緊張性・失敗性不安	度数	396	2,098	138	F ( 2 , 2629 ) = 7.26 ** 特別 > 初等, 中等
	平均値	-0.03	-0.01	0.25	
	標準偏差	0.89	0.80	0.71	

注) \*\* は 1%水準以下で, \* は 5%水準以下で有意であることを示す。

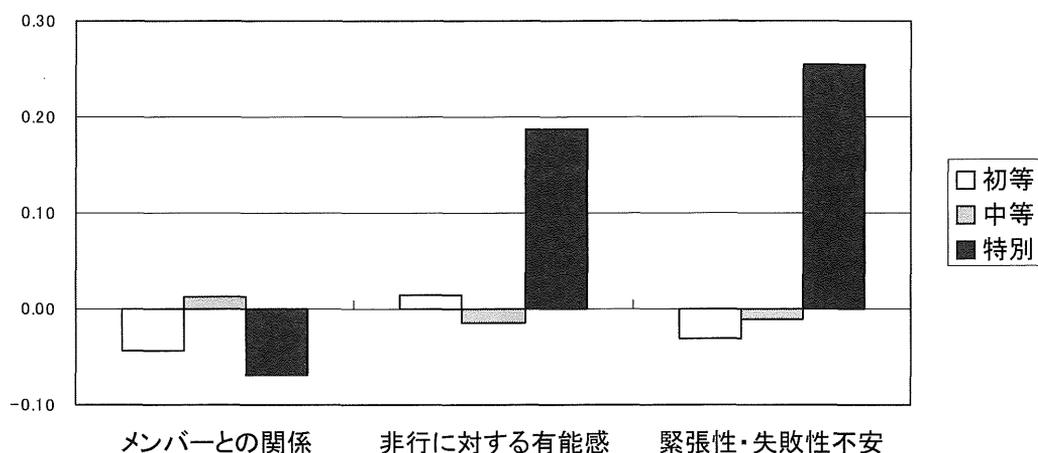


図18 種別別の非行 SE 下位尺度の平均値

## (エ) 性別

性別に、非行 SE 尺度の下位尺度の平均値を算出し、t 検定を行った結果を、表22、図19に示す。「メンバーとの関係」(t = 2.26, p < .05), 「緊張性・失敗性不安」(t = 4.92, p < .01) の平均値は、女子の方が有意に高くなっている。

表22 性別の非行 SE 下位尺度の t 検定

尺度	男子		女子		t 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
メンバーとの関係	-0.01	0.94	0.12	0.87	-2.26 *
非行に対する有能感	0.00	0.92	0.02	0.90	-0.44
緊張性・失敗性不安	-0.03	0.81	0.23	0.82	-4.92 **

注) \*\* は 1%水準以下で, \* は 5%水準以下で有意であることを示す。

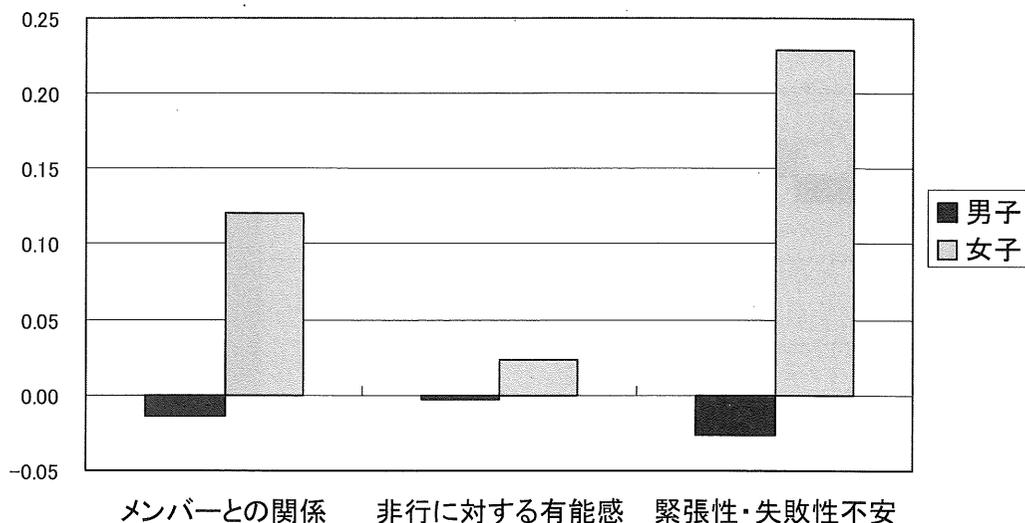


図19 性別の非行 SE 下位尺度の平均値

## (オ) 年齢

年齢を18歳以上、18歳未満の2群に分けて、非行 SE 尺度の下位尺度の平均値を算出し、t 検定を行った結果を、表23、図20に示す。2群間に有意差は見られなかった。

## (カ) 知能 SS

知能 SS を40以上、40未満の2群に分けて、非行 SE 尺度の下位尺度の平均値を算出し、t 検定を行った結果を表24、図21に示す。「非行に対する有能感」、「緊張性・失敗性不安」の平均値は、知能 SS 40以上の方が有意に高くなっている ( $t = 3.87, p < .01, t = 2.81, p < .05$ )。

表23 年齢別の非行 SE 下位尺度の t 検定

尺度	18歳以上		18歳未満		t 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
メンバーとの関係	0.00	0.95	0.00	0.91	-0.19
非行に対する有能感	0.01	0.92	-0.02	0.90	0.79
緊張性・失敗性不安	-0.03	0.81	-0.01	0.83	0.34

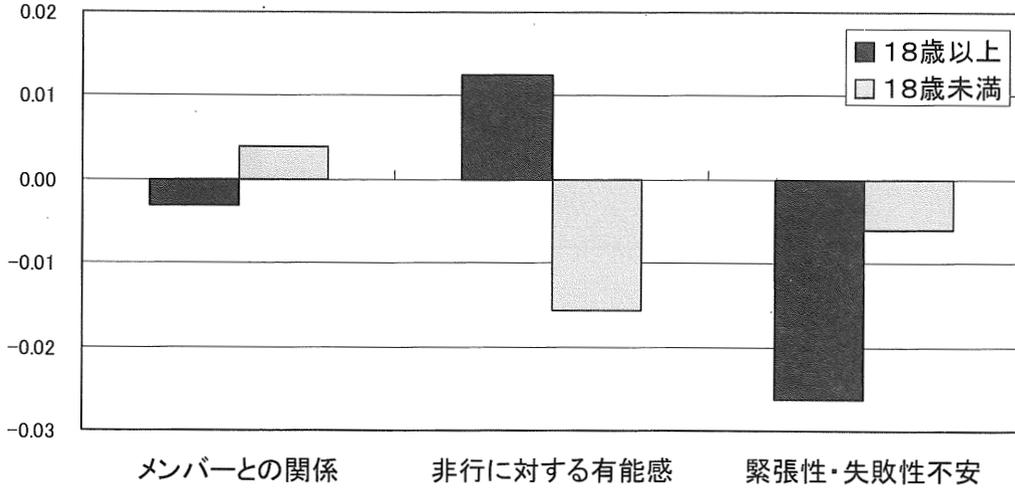


図20 年齢別の非行 SE 下位尺度の平均値

表24 知能 SS 別の非行 SE 下位尺度の t 検定

尺度	SS 40以上		SS 40未満		t 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
メンバーとの関係	0.03	0.92	-0.04	0.94	1.81
非行に対する有能感	0.06	0.93	-0.08	0.89	3.87 **
緊張性・失敗性不安	0.04	0.79	-0.05	0.84	2.81 **

注) \*\* は 1%水準以下で, \* は 5%水準以下で有意であることを示す。

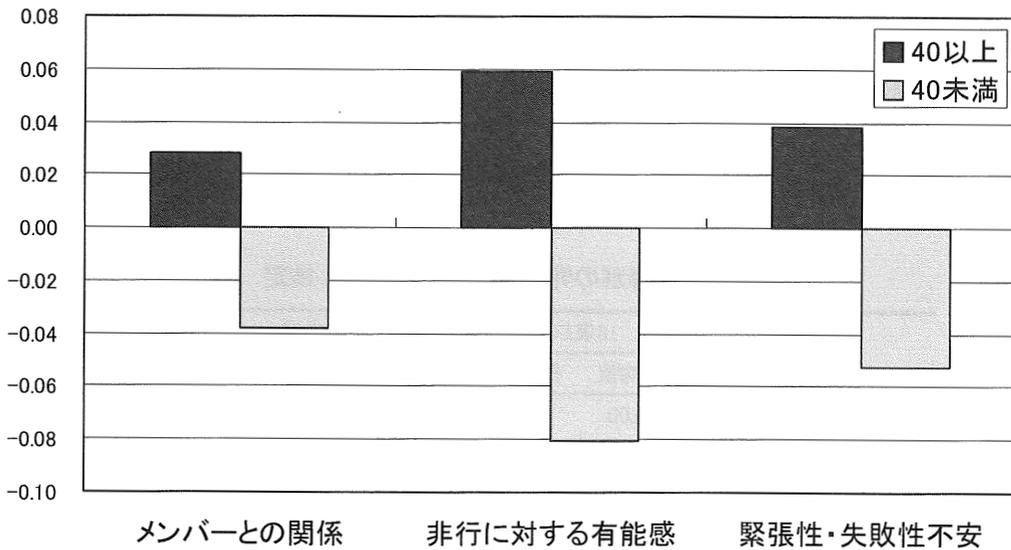


図21 知能 SS 別の非行 SE 下位尺度の平均値

(4) 仕事の自己効力について

4項目で構成される尺度であり、因子分析は行っていない。合計得点を尺度得点とした。

短期処遇の教育過程（新入時，出院期）の差を見るためにt検定を行ったが、有意な差は見られなかった（表25，図22）。

同様に、長期処遇の教育過程（新入時，中間期，出院期）にも有意差は見られなかった（表26，図23）。

表25 短期処遇における教育過程別の仕事 SE 尺度の t 検定

尺 度	新入時		出院期		t 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
仕事の自己効力	13.13	2.414	12.91	2.376	0.72

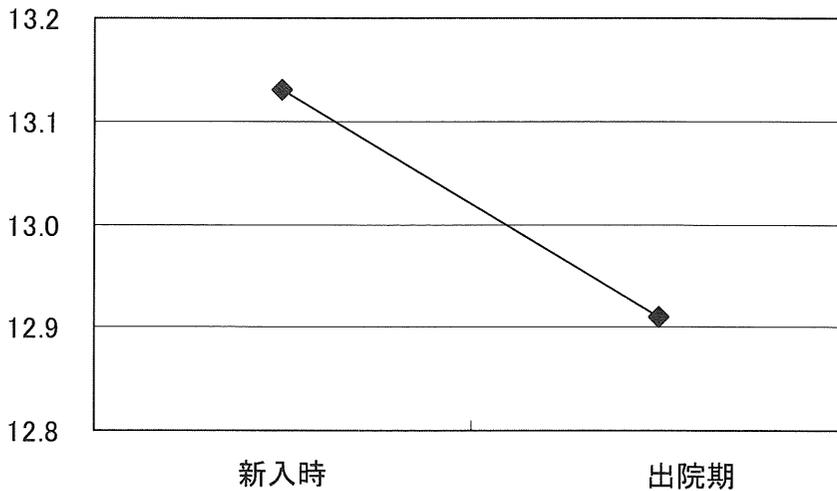


図22 短期処遇における教育過程別の仕事 SE 尺度の平均値

表26 長期処遇における教育過程別の仕事 SE 尺度の分散分析

尺 度	新入時	中間期	出院期	F 値
仕事に対する効力	12.45	12.31	12.58	F(2, 2378) = 2.00
度数	344	1,515	522	
標準偏差	2.58	2.86	2.42	

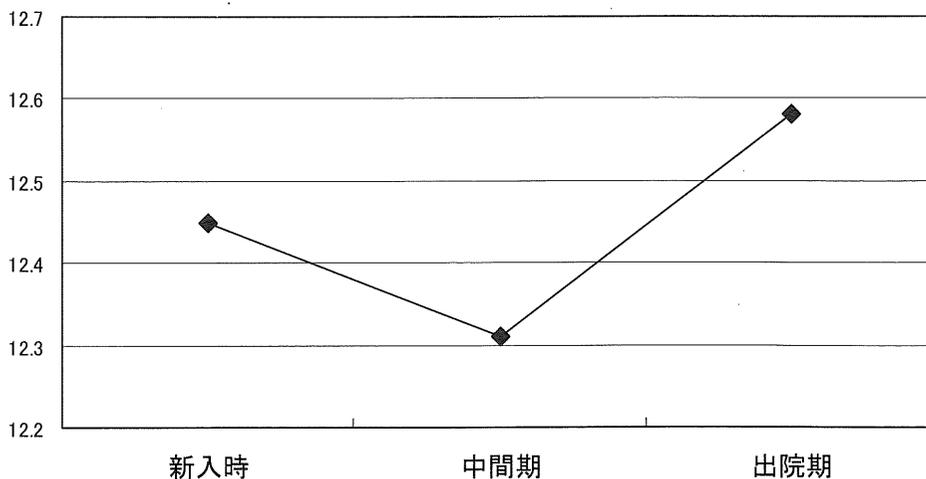


図23 長期処遇における教育過程別の仕事 SE 尺度の平均値

## 2 結果予想について

### (1) 仕事の結果予想

#### ア 短期処遇

親からの肯定、親からの否定の回避、仲間からの肯定、仲間からの否定の回避のそれぞれに含まれる項目の合計点を算出した。短期処遇の各教育過程（新入時、出院期）による差が見られるかを検討するため、t検定を行った結果を表27、図24に示す。

「仲間からの肯定」( $t = 4.73, p < .01$ )、「親からの肯定」( $t = 3.71, p < .01$ )において、新入時の方が有意に高くなっている。「仲間からの否定の回避」、「親からの否定の回避」では有意差は見られなかった。

表27 短期処遇における仕事に関する結果予想の t 検定

尺度	新入時		出院期		t 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
仲間からの肯定	11.34	3.04	9.44	3.16	4.73 **
親からの肯定	12.20	3.23	10.56	3.49	3.78 **
仲間からの否定	7.46	2.65	6.96	2.98	1.39
親からの否定	12.58	1.63	12.89	1.47	-1.52

注) \*\* は 1%水準以下で有意であることを示す。

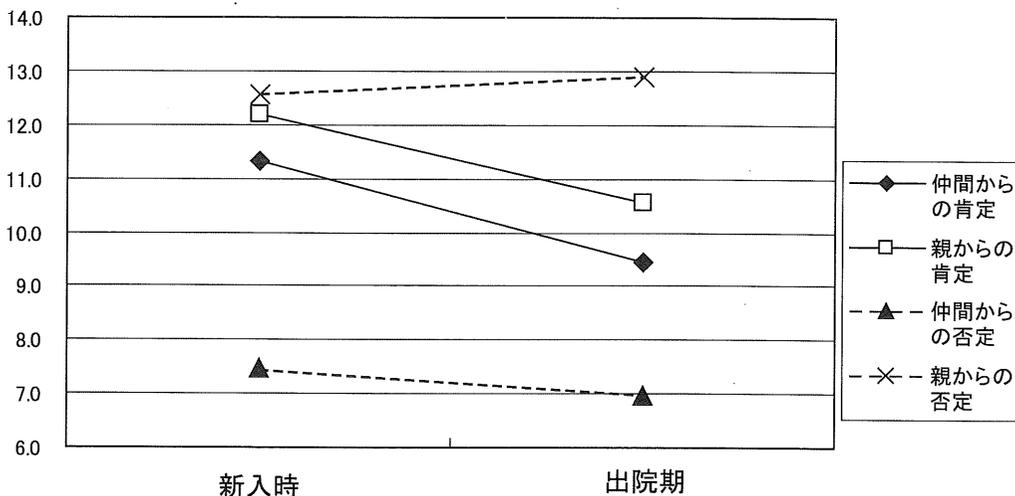


図24 短期処遇における仕事に関する結果予期の平均値

イ 長期処遇

長期処遇の各教育過程別（新入時，中間期，出院期）に，一元配置分散分析を行った結果を，表28，図25に示す。

「仲間からの肯定」(F ( 2 , 2379 ) = 14.06, p<.01), 「親からの肯定」(F ( 2 , 2379 ) = 10.78, p<.01) で有意差がみられた。それぞれについて LSD 検定による多重比較を行ったところ，「仲間からの肯定」と「親からの肯定」は，共に新入時が中間期及び出院期より有意に高かった。

表28 長期処遇における仕事に関する結果予期の分散分析

尺度		新入時	中間期	出院期	F 値
仲間からの肯定	度数	344	1,516	522	
	平均値	11.26	10.30	10.10	F ( 2 , 2379 ) = 14.06
	標準偏差	3.28	3.41	3.32	新入時>中間期, 出院期
親からの肯定	度数	344	1,516	522	
	平均値	12.10	11.08	11.13	F ( 2 , 2379 ) = 10.78
	標準偏差	3.49	3.79	3.65	新入時>中間期, 出院期
仲間からの否定	度数	344	1,516	522	
	平均値	6.97	7.07	7.06	F ( 2 , 2379 ) = 0.20
	標準偏差	2.52	2.74	2.71	
親からの否定	度数	344	1,516	522	
	平均値	12.61	12.54	12.53	F ( 2 , 2379 ) = 0.25
	標準偏差	1.66	1.83	1.84	

注) \*\* は 1%水準以下で有意であることを示す。

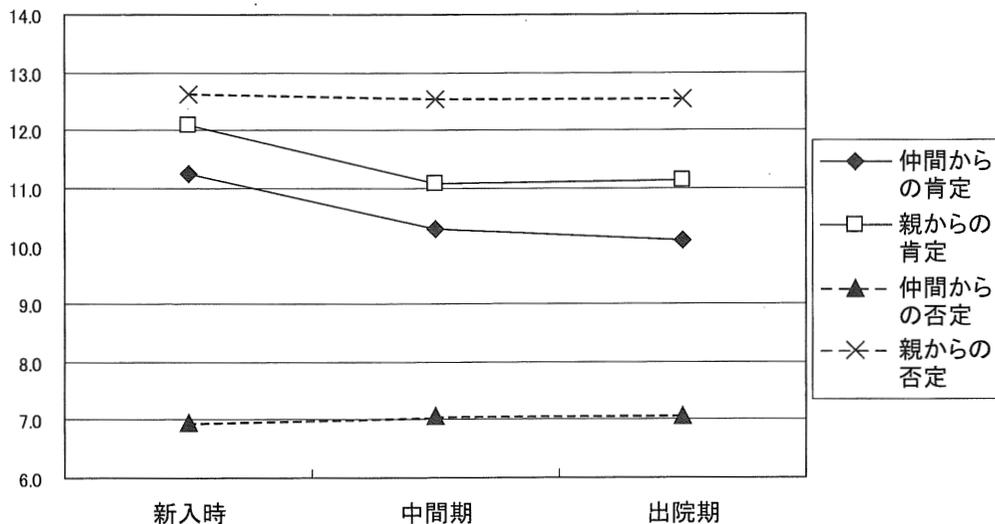


図25 長期処遇における仕事の結果予期の平均値

## (2) 非行の結果予期

(1)と同様に、非行の結果予期についても処遇過程による差があるかを調べたが、有意差は見られなかった(表29, 30, 図26, 27)。

表29 短期処遇における非行に関する結果予期の t 検定

尺度	新入時		出院期		t 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
仲間からの肯定	1.41	0.73	1.53	0.87	-1.20
親からの肯定	1.45	0.81	1.51	0.88	-0.57
仲間からの否定	2.84	1.27	2.93	1.28	-0.50
親からの否定	1.06	0.26	1.07	0.36	-0.37

注) \*\* は 1%水準以下で有意であることを示す。

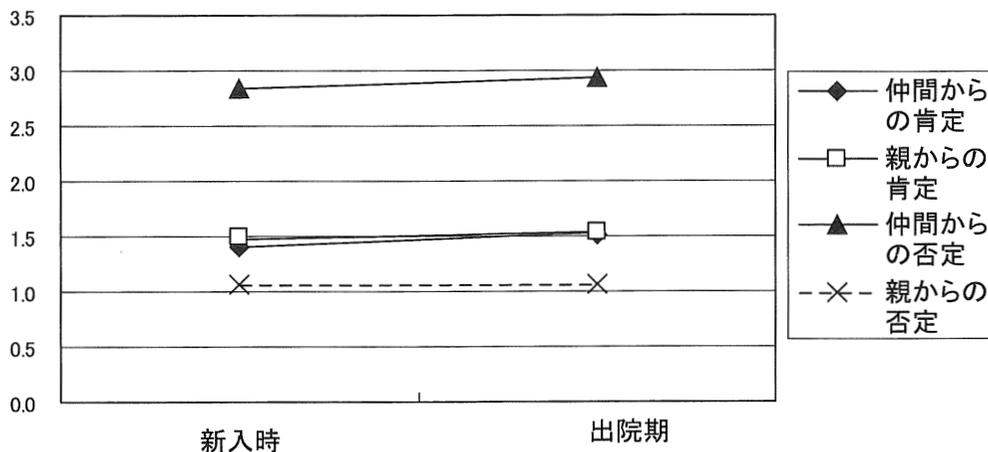


図26 短期処遇における非行に関する結果予期の平均値

表30 長期処遇における非行に関する結果予期の分散分析

尺度		新入時	中間期	出院期	F 値
仲間からの肯定	度数	344	1,516	522	F ( 2 , 2379 ) = 1.48
	平均値	1.38	1.45	1.42	
	標準偏差	0.69	0.76	0.78	
親からの肯定	度数	344	1,516	522	F ( 2 , 2379 ) = 1.36
	平均値	2.93	2.97	2.99	
	標準偏差	0.81	0.84	0.91	
仲間からの否定	度数	344	1,516	522	F ( 2 , 2379 ) = 0.25
	平均値	1.40	1.47	1.50	
	標準偏差	1.28	1.25	1.23	
親からの否定	度数	344	1,516	522	F ( 2 , 2379 ) = 0.98
	平均値	1.13	1.17	1.16	
	標準偏差	0.49	0.57	0.50	

注) \*\* は 1%水準以下で有意であることを示す。

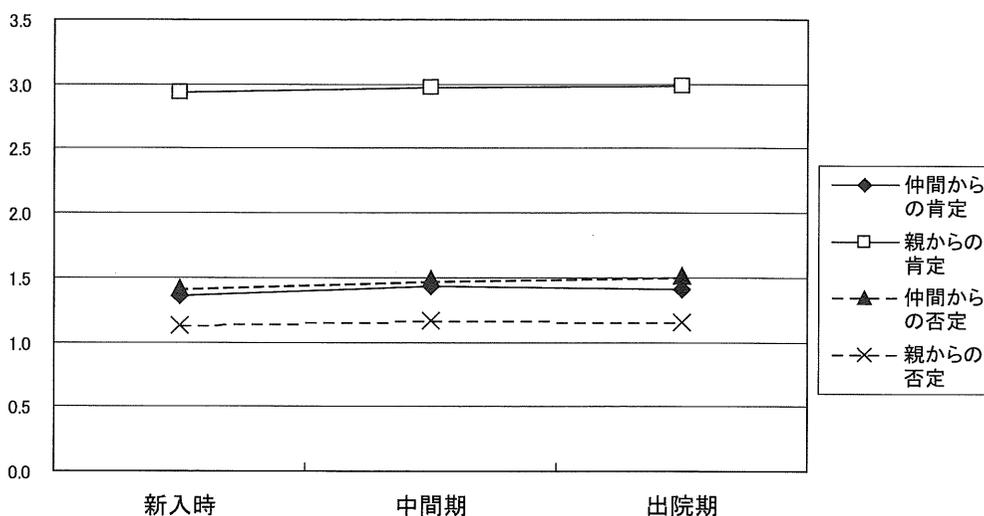


図27 長期処遇における仕事の結果予期の平均値

### (3) 出院後の結果予期

#### ア 短期処遇

短期処遇の各教育過程別（新入時，出院期）に各項目においてt検定を行ったが，どの項目においても有意差は見られなかった（表31，図28）。

表31 短期処遇における出院後の結果予期のt検定

尺度	新入時		出院期		t 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
仕事について	3.14	0.76	3.17	0.76	-0.24
交友関係について	3.02	0.81	2.99	0.84	0.28
対人関係について	3.13	0.70	3.05	0.83	0.80
本件について	3.47	0.64	3.63	0.62	-1.84
本件以外の非行について	3.40	0.68	3.54	0.65	-1.60

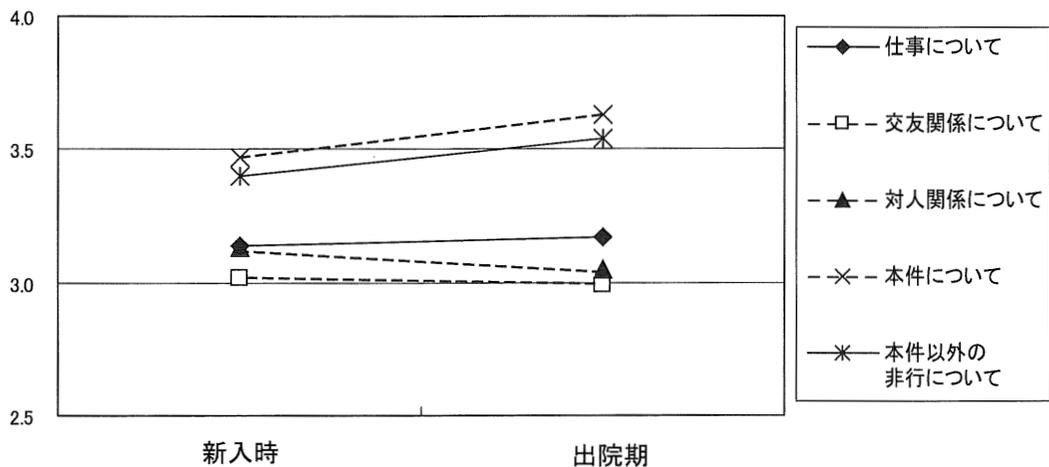


図28 短期処遇における出院後の結果予期の平均値

## イ 長期処遇

長期処遇の各教育過程別（新入時，中間期，出院期）に，各項目において一元配置分散分析を行った結果を，表32，図29に示す。

「仕事」( $F(2, 2379) = 4.70, p < .01$ )，「交友関係」( $F(2, 2379) = 9.16, p < .01$ )，「対人関係」( $F(2, 2379) = 6.22, p < .01$ )，「本件非行予防」( $F(2, 2379) = 9.75, p < .01$ )，「本件以外の非行予防」( $F(2, 2379) = 10.72, p < .01$ )のすべてに有意差が見られた。LSD検定による多重比較を行ったところ，「仕事」と「対人関係」は，新入時及び出院期が中間期より有意に高かった。また，「交友関係」，「本件非行予防」，「本件以外の非行予防」では，出院期が中間期より有意に高かった。

表32 長期処遇における出院後の結果予期の分散分析

尺度		新入時	中間期	出院期	F 値
仕事について	度数	344	1,516	522	
	平均値	3.15	3.04	3.15	F ( 2, 2379) = 4.70
	標準偏差	0.85	0.89	0.80	新入時, 出院期 > 中間期
交友関係について	度数	344	1,516	522	
	平均値	3.01	2.93	3.12	F ( 2, 2379) = 9.16
	標準偏差	0.91	0.91	0.79	出院期 > 中間期
対人関係について	度数	344	1,516	522	
	平均値	3.02	2.91	3.06	F ( 2, 2379) = 6.22
	標準偏差	0.88	0.91	0.79	新入時, 出院期 > 中間期
本件非行について	度数	344	1,516	522	
	平均値	3.43	3.35	3.53	F ( 2, 2379) = 9.75
	標準偏差	0.75	0.82	0.69	出院期 > 中間期
本件以外の非行について	度数	344	1,516	522	
	平均値	3.36	3.28	3.47	F ( 2, 2379) = 10.72
	標準偏差	0.77	0.84	0.71	出院期 > 中間期

注) \*\* は 1%水準以下で有意であることを示す。

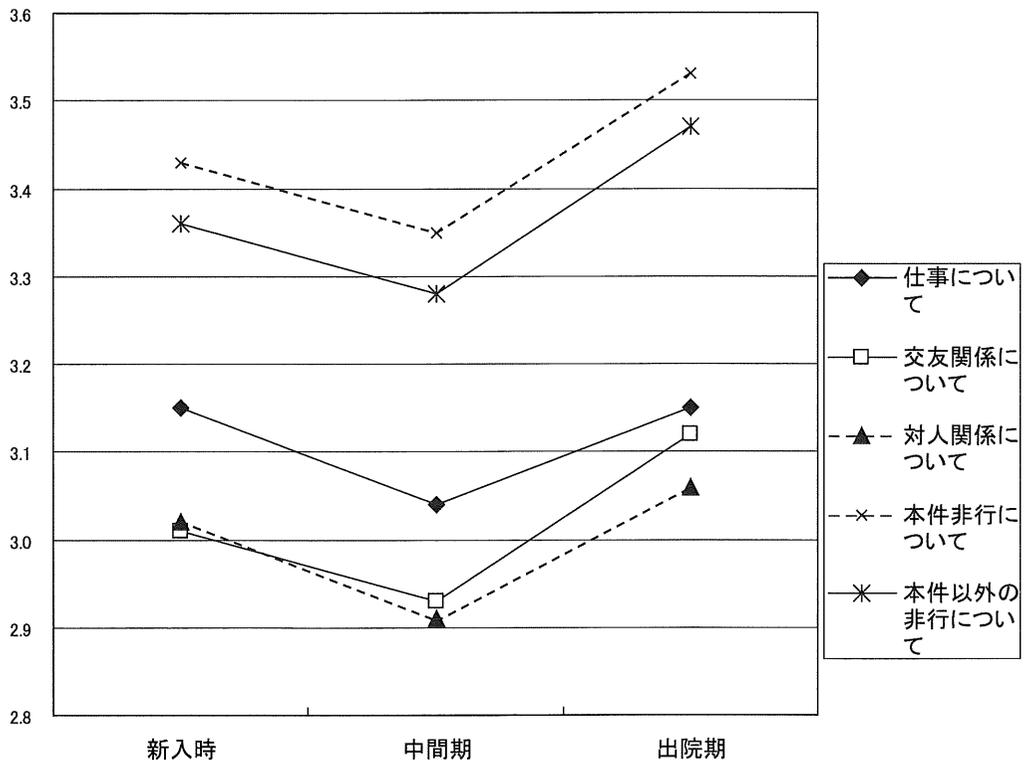


図29 長期処遇における出院後の結果予期の平均値

## 3 自己効力の変化と情報源について

## (1) 仕事

## ア 全体

入院時と比較して、自信をなくした者（自己効力が低下した者）は245名、自信が付いた者（自己効力が上昇した者）は1,829名であった。

自信をなくした者も自信が付いた者も、一番影響を受けたものとして、「実科や実習、資格の取得などを通して」を選択している。

これについての $\chi^2$ 検定及び残差分析の結果を表33、図30に示す。自信をなくした者では、「他生との話の中で」、「他生ががんばっている姿を見て」、「読書やVTR視聴、外部の先生の面接や講話を通して」、「目標としている成績が達成できなくて」が有意に多かった。また、自信が付いた者では、「実科や実習、資格取得などを通して」、「家族との面会や手紙を通して」が有意に多かった。

表33 仕事についての自信度

		下降	上昇	合計	検定結果	
問1	先生との面接等をと おして	度数 (%)	25 (10.2)	146 (8.0)	171 (8.2)	$\chi^2(7) = 95.34^{**}$
		調整済み残差	[1.2]	[-1.2]		
問2	他生との話の中で	度数 (%)	18 (7.3)	50 (2.7)	68 (3.3)	
		調整済み残差	▲[3.8]	▼[-3.8]		
問3	実科や実習、資格の取 得などを通して	度数 (%)	50 (20.4)	693 (37.9)	743 (35.8)	
		調整済み残差	▼[-5.4]	▲[5.4]		
問4	他生ががんばっている 姿を見て	度数 (%)	14 (5.7)	30 (1.6)	44 (2.1)	
		調整済み残差	▲[4.2]	▼[-4.2]		
問5	読書やVTR視聴、外部 の先生の面接や講話を 通して	度数 (%)	32 (13.1)	88 (4.8)	120 (5.8)	
		調整済み残差	▲[5.2]	▼[-5.2]		
問6	いつの間にか自分にも できる（できない）と いう気持ちが出てきた	度数 (%)	45 (18.4)	342 (18.7)	387 (18.7)	
		調整済み残差	[-0.1]	[0.1]		
問7	目標としている成績が 達成されて（達成でき なくて）	度数 (%)	18 (7.3)	47 (2.6)	65 (3.1)	
		調整済み残差	▲[4.0]	▼[-4.0]		
問8	家族との面会や手紙を 通して	度数 (%)	43 (17.6)	433 (23.7)	476 (23.0)	
		調整済み残差	▼[-2.1]	▲[2.1]		
合 計		度数 (%)	245 (100.0)	1,829 (100.0)	2,074 (100.0)	

注1) \*\* は1%水準で有意差があることを示す。

注2) 残差分析の結果、▲は期待値より有意に高いこと、▼は有意に低いことを示す（5%水準）。

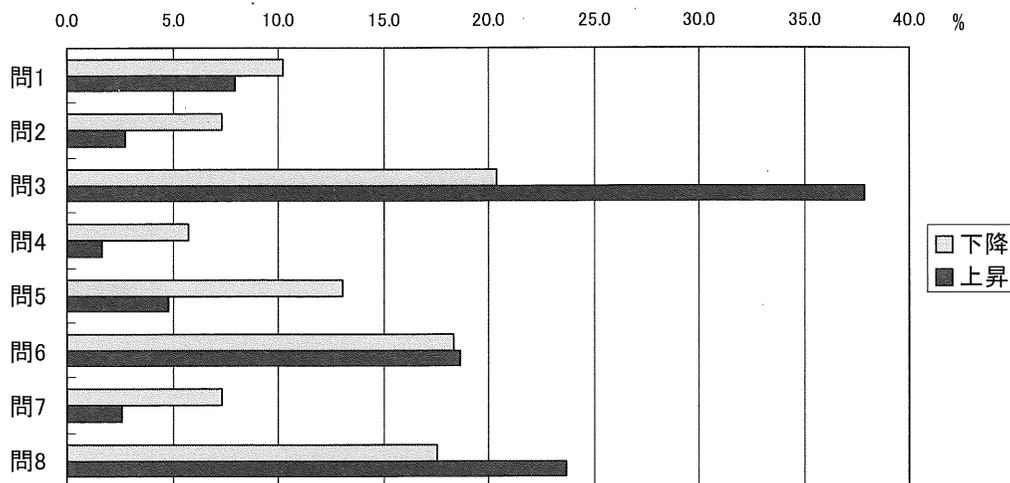


図30 仕事についての自信度

表34 自信度の変化（仕事：長期処遇：教育過程課程別）

		中間期	出院期	合計	検定結果	
問1	先生との面接等をとおして	度数	84	48	132	$\chi^2(7) = 83.23^{**}$
		(%)	(6.6)	(10.1)	(7.6)	
		調整済み残差	▼[-2.4]	▲[2.4]		
問2	他生との話の中で	度数	38	12	50	
		(%)	(3.0)	(2.5)	(2.9)	
		調整済み残差	[0.5]	[-0.5]		
問3	実科や実習、資格の取得などを通して	度数	408	249	657	
		(%)	(32.2)	(52.4)	(37.7)	
		調整済み残差	▼[-7.7]	▲[7.7]		
問4	他生ががんばっている姿を見て	度数	27	2	29	
		(%)	(2.1)	(0.4)	(1.7)	
		調整済み残差	▲[2.5]	▼[-2.5]		
問5	読書やVTR視聴、外部の先生の面接や講話を通して	度数	73	13	86	
		(%)	(5.8)	(2.7)	(4.9)	
		調整済み残差	▲[2.6]	▼[-2.6]		
問6	いつの間にか自分にもできる（できない）という気持ちが出てきた	度数	259	67	326	
		(%)	(20.5)	(14.1)	(18.7)	
		調整済み残差	▲[3.0]	▼[-3.0]		
問7	目標としている成績が達成されて（達成できなくて）	度数	33	11	44	
		(%)	(2.6)	(2.3)	(2.5)	
		調整済み残差	[0.3]	[-0.3]		
問8	家族との面会や手紙を通して	度数	344	73	417	
		(%)	(27.2)	(15.4)	(24.0)	
		調整済み残差	▲[5.1]	▼[-5.1]		
合計		度数	1,266	475	1,741	
		(%)	(100.0)	(99.9)	(100.0)	

注1) \*\*は1%水準で有意差があることを示す。

注2) 残差分析の結果、▲は期待値より有意に高いこと、▼は有意に低いことを示す（5%水準）。

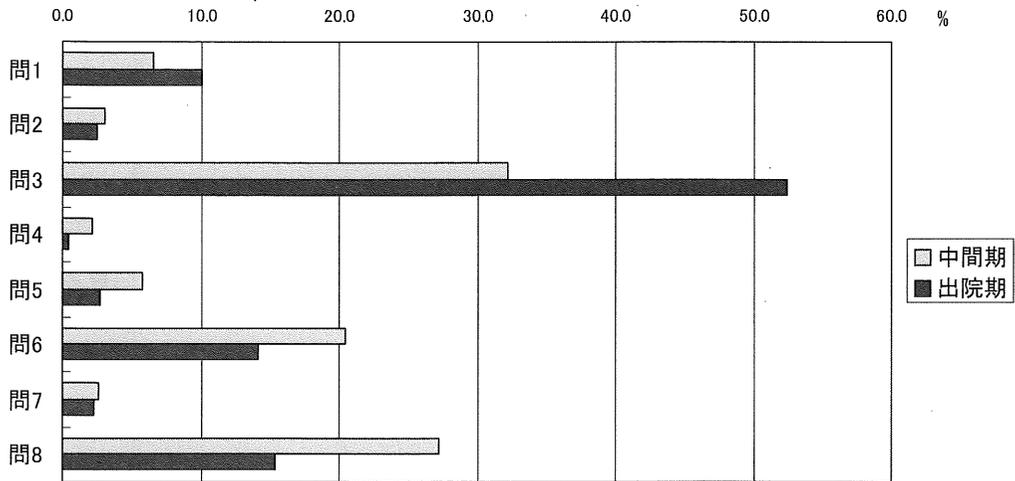


図31 自信度の変化（仕事：長期処遇：教育過程別）

表35 自信度の変化（仕事：短期・長期処遇別）

		短期	長期	合計	検定結果	
問1	先生との面接等とお して	度数	14	132	171	P = 0.08 m
		(%)	(15.9)	(7.6)	(8.2)	
		調整済み残差	[2.8]	[-2.8]		
問2	他生との話の中で	度数	0	50	68	
		(%)	(0.0)	(2.9)	(3.3)	
		調整済み残差	[-1.6]	[1.6]		
問3	実科や実習、資格の取 得などを通して	度数	36	657	743	
		(%)	(40.9)	(37.7)	(35.8)	
		調整済み残差	[0.6]	[-0.6]		
問4	他生ががんばっている 姿を見て	度数	1	29	44	
		(%)	(1.1)	(1.7)	(2.1)	
		調整済み残差	[-0.4]	[0.4]		
問5	読書やVTR視聴、外部 の先生の面接や講話を 通して	度数	2	86	120	
		(%)	(2.3)	(4.9)	(5.8)	
		調整済み残差	[-1.1]	[1.1]		
問6	いつの間にか自分にも できる（できない）と いう気持ちが出てきた	度数	16	326	387	
		(%)	(18.2)	(18.7)	(18.7)	
		調整済み残差	[-0.1]	[0.1]		
問7	目標としている成績が 達成されて（達成でき なくて）	度数	3	44	65	
		(%)	(3.4)	(2.5)	(3.1)	
		調整済み残差	[0.5]	[-0.5]		
問8	家族との面会や手紙を 通して	度数	16	417	476	
		(%)	(18.2)	(24.0)	(23.0)	
		調整済み残差	[-1.2]	[1.2]		
合 計		度数	88	1,741	2,074	
		(%)	(100.0)	(100.0)	(100.0)	

注) P値の「m」はモンテカルロ法であることを示す。

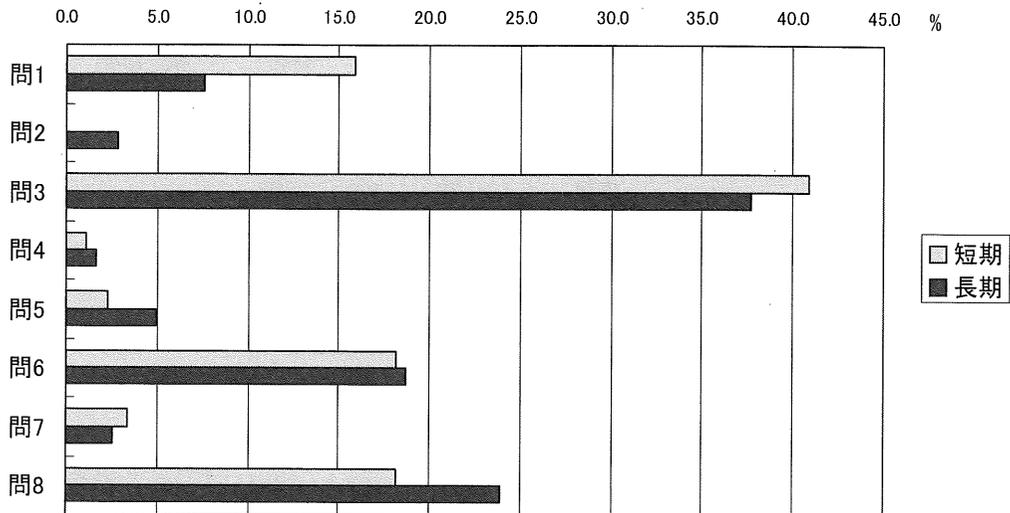


図32 自信度の変化（仕事：短期・長期処遇別）

#### イ 教育過程別

長期処遇で自信が付いた者の情報源に中間期と出院期で差があるかを見るために、 $\chi^2$  検定を行った結果を表34、図31に示す。中間期では「他生のがんばっている姿を見て」、「読書やVTR視聴、外部の先生の面接や講話を通して」、「いつの間にか自分にもできるという気持ちが出てきた」、「家族との面会や手紙を通して」が有意に多く、出院期では、「先生との面接を通して」、「実科や実習、資格の取得などを通して」が有意に多かった。

#### ウ 短期・長期処遇別

短期処遇と長期処遇で、自信が付いた者の情報源に差があるかを見るために $\chi^2$  検定を行ったが、有意差は見られなかった（表35、図32）。

### (2) 交友関係

#### ア 全体

入院時と比較して自信をなくした者は360名、自信が付いた者は1,722名である。

自信をなくした者が一番影響を受けたのは、「いつの間にか自分にもできないという気持ちが出てきた」であり、自信が付いた者は、一番影響を受けたものとして、「家族との面会や手紙を通して」を選択している。

これについての $\chi^2$  検定及び残差分析の結果を表36、図33に示す。自信をなくした者では、「他生との話の中で」、「いつの間にか自分にもできないという気持ちが出てきた」、「目標としている成績が達成できなくて」が有意に多かった。また、自信が付いた者では、「先生との面接を通して」、「家族との面会や手紙を通して」が有意に多かった。

表36 自信度の変化（交友関係）

		下降	上昇	合計	検定結果	
問1	先生との面接等をとおして	度数	76	481	557	
		(%)	(21.1)	(27.9)	(26.8)	
		調整済み残差	▼[-2.7]	▲[2.7]		
問2	他生との話の中で	度数	70	158	228	
		(%)	(19.4)	(9.2)	(11.0)	
		調整済み残差	▲[5.7]	▼[-5.7]		
問3	実科や実習，資格の取得などを通して	度数	7	17	24	
		(%)	(1.9)	(1.0)	(1.2)	
		調整済み残差	[1.5]	[-1.5]		
問4	他生ががんばっている姿を見て	度数	8	54	62	
		(%)	(2.2)	(3.1)	(3.0)	
		調整済み残差	[-0.9]	[0.9]		
問5	読書やVTR視聴，外部の先生の面接や講話を通して	度数	31	116	147	$\chi^2(7) = 64.95$
		(%)	(8.6)	(6.7)	(7.1)	
		調整済み残差	[1.3]	[-1.3]		
問6	いつの間にか自分にもできる（できない）という気持ちが出てきた	度数	83	308	391	
		(%)	(23.1)	(17.9)	(18.8)	
		調整済み残差	▲[2.3]	▼[-2.3]		
問7	目標としている成績が達成されて（達成できなくて）	度数	15	34	49	
		(%)	(4.2)	(2.0)	(2.4)	
		調整済み残差	▲[2.5]	▼[-2.5]		
問8	家族との面会や手紙を通して	度数	70	554	624	
		(%)	(19.4)	(32.2)	(30.0)	
		調整済み残差	▼[-4.8]	▲[4.8]		
合計		度数	360	1,722	2,082	
		(%)	(100.0)	(100.0)	(100.0)	

注1) \*\* は1%水準で有意差があることを示す。

注2) 残差分析の結果，▲は期待値より有意に高いこと，▼は有意に低いことを示す（5%水準）。

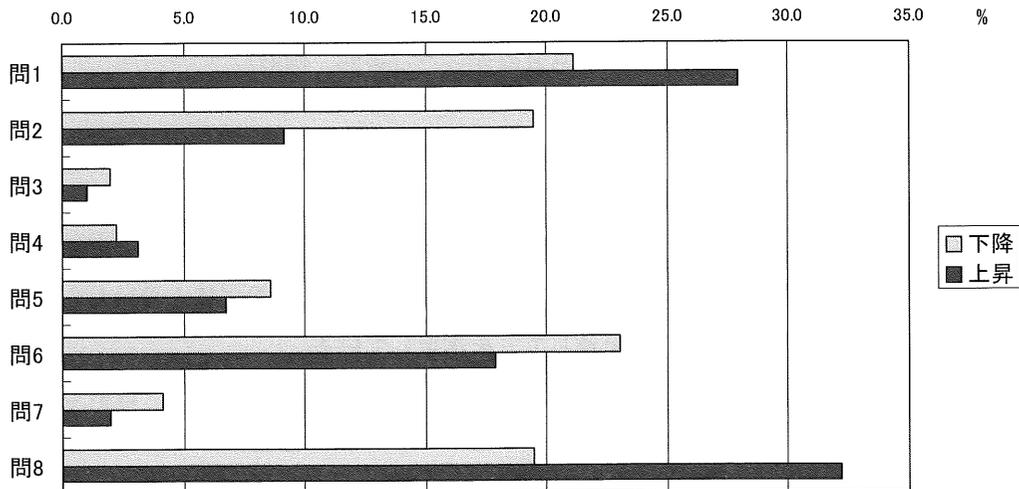


図33 自信度の変化（交友関係）

## イ 教育過程別

長期処遇で自信が付いた者の情報源に中間期と出院期で差があるかを見るため、 $\chi^2$ 検定を行った結果を表37、図34に示す。中間期では、「いつの間にか自分にもできるという気持ちが出てきた」が有意に多く、出院期では「先生との面接を通して」が有意に多かった。

## ウ 短期・長期処遇別

自信が付いた者の情報源に短期処遇と長期処遇で差があるかを見るため、 $\chi^2$ 検定を行った結果を表38、図35に示す。短期処遇は「先生との面接を通して」が有意に多く、長期処遇では「いつの間にか自分にもできるという気持ちが出てきた」が有意に多かった。

表37 自信度の変化（交友関係：長期処遇：教育過程別）

			中間期	出院期	合計	検定結果
問1	先生との面接等とおして	度数	277	162	439	
		(%)	(23.2)	(35.9)	(26.7)	
		調整済み残差	▼[-5.2]	▲[5.2]		
問2	他生との話の中で	度数	115	36	151	
		(%)	(9.6)	(8.0)	(9.2)	
		調整済み残差	[1.0]	[-1.0]		
問3	実科や実習、資格の取得などを通して	度数	13	4	17	
		(%)	(1.1)	(0.9)	(1.0)	
		調整済み残差	[0.4]	[-0.4]		
問4	他生ががんばっている姿を見て	度数	42	11	53	
		(%)	(3.5)	(2.4)	(3.2)	
		調整済み残差	[1.1]	[-1.1]		
問5	読書やVTR視聴、外部の先生との面接や講話を通して	度数	89	25	114	$\chi^2(7) = 33.05^{**}$
		(%)	(7.5)	(5.6)	(6.9)	
		調整済み残差	[1.4]	[-1.4]		
問6	いつの間にか自分にもできる（できない）という気持ちが出てきた	度数	236	68	304	
		(%)	(19.8)	(15.1)	(18.5)	
		調整済み残差	▲[2.2]	▼[-2.2]		
問7	目標としている成績が達成されて（達成できなくて）	度数	20	14	34	
		(%)	(1.7)	(3.1)	(2.1)	
		調整済み残差	[-1.8]	[1.8]		
問8	家族との面会や手紙を通して	度数	401	131	532	
		(%)	(33.6)	(29.0)	(32.4)	
		調整済み残差	[1.8]	[-1.8]		
合計		度数	1,193	451	1,644	
		(%)	(100.0)	(100.0)	(100.0)	

注1) \*\* は1%水準で有意差があることを示す。

注2) 残差分析の結果、▲は期待値より有意に高いこと、▼は有意に低いことを示す（5%水準）。

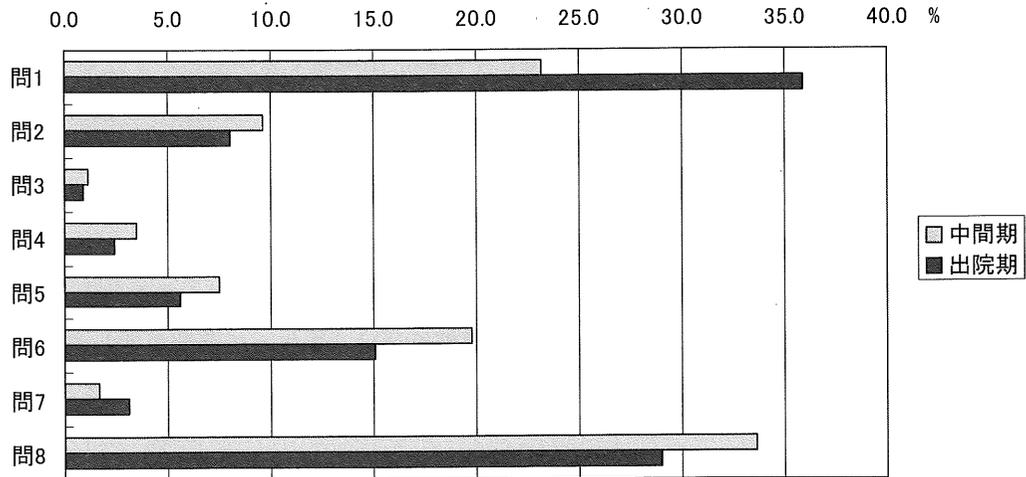


図34 自信度の変化 (交友関係：長期処遇：教育過程別)

表38 自信度の変化 (交友関係：短期・長期処遇別)

		短期	長期	合計	検定結果	
問1	先生との面接等をと おして	度数 (%)	42 (53.8)	439 (26.7)	481 (27.9)	$\chi^2(7) = 32.91^{**}$
	調整済み残差	▲[5.2]	▼[-5.2]			
問2	他生との話の中で	度数 (%)	7 (9.0)	151 (9.2)	158 (9.2)	
	調整済み残差	[-0.1]	[0.1]			
問3	実科や実習、資格の取 得などを通して	度数 (%)	0 (0.0)	17 (1.0)	17 (1.0)	
	調整済み残差	[-0.9]	[0.9]			
問4	他生ががんばっている 姿を見て	度数 (%)	1 (1.3)	53 (3.2)	54 (3.1)	
	調整済み残差	[-1.0]	[1.0]			
問5	読書やVTR視聴、外部 の先生との面接や講話を 通して	度数 (%)	2 (2.6)	114 (6.9)	116 (6.7)	
	調整済み残差	[-1.5]	[1.5]			
問6	いつの間にか自分にも できる(できない)と いう気持ちが出てきた	度数 (%)	4 (5.1)	304 (18.5)	308 (17.9)	
	調整済み残差	▼[-3.0]	▲[3.0]			
問7	目標としている成績が 達成されて(達成でき なくて)	度数 (%)	0 (0.0)	34 (2.1)	34 (2.0)	
	調整済み残差	[-1.3]	[1.3]			
問8	家族との面会や手紙を 通して	度数 (%)	22 (28.2)	532 (32.4)	554 (32.2)	
	調整済み残差	[-0.8]	[0.8]			
合 計		度数 (%)	78 (100.0)	1,644 (100.0)	1,722 (100.0)	

注1) \*\* は1%水準で有意差があることを示す。

注2) 残差分析の結果, ▲は期待値より有意に高いこと, ▼は有意に低いことを示す(5%水準)。

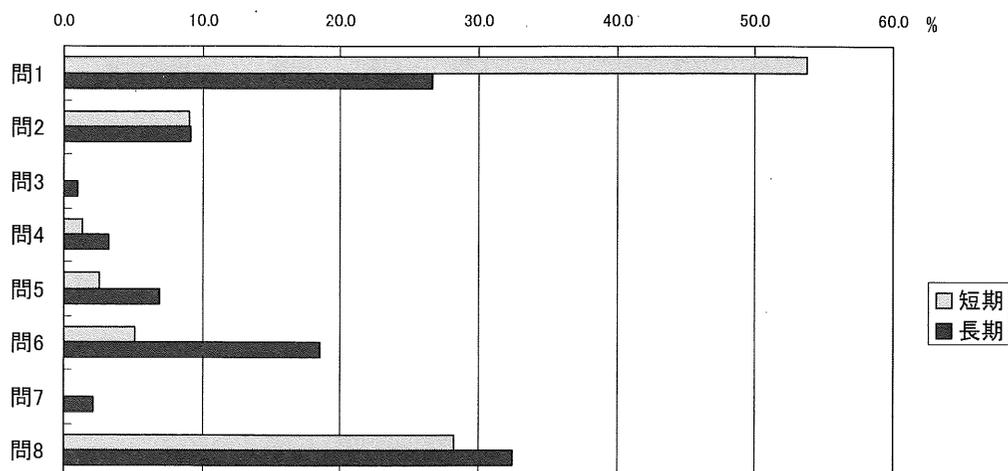


図35 自信度の変化（交友関係：短期・長期処遇別）

### (3) 対人関係

#### ア 全体

自信をなくした者は300名、自信が付いた者は1,777名である。

自信をなくした者も、自信が付いた者も、一番影響を受けたものとして、「家族との面会や手紙を通して」を選択している。

これについて $\chi^2$ 検定を行った結果を、表39、図36に示す。自信をなくした者では、「他生との話の中で」、「いつの間にか自分にもできないという気持ちが出てきた」、「目標としている成績が達成できなくて」が有意に多かった。また、自信が付いた者では、「家族との面会や手紙を通して」が有意に多かった。

#### イ 教育過程別

長期処遇で自信が付いた者の情報源に中間期と出院期で差があるかを見るため、 $\chi^2$ 検定を行った結果を、表40、図37に示す。中間期では、「いつの間にか自分にもできるという気持ちが出てきた」、「家族との面会や手紙を通して」が有意に多く、出院期では、「先生との面接を通して」が有意に多かった。

#### ウ 短期・長期処遇別

さらに、自信が付いた者の情報源に短期処遇と長期処遇で差があるかを見るため、 $\chi^2$ 検定を行った結果を、表41、図38に示す。短期処遇では、「先生との面接を通して」が有意に多かった。

表39 自信度の変化（対人関係）

		下降	上昇	合計	検定結果	
問1	先生との面接等とお して	度数	64	434	498	$\chi^2(7) = 64.95^{**}$
		(%)	(21.3)	(24.4)	(24.0)	
		調整済み残差	[-1.2]	[1.2]		
問2	他生との話の中で	度数	40	108	148	
		(%)	(13.3)	(6.1)	(7.1)	
		調整済み残差	▲[4.5]	▼[-4.5]		
問3	実科や実習，資格の取 得などを通して	度数	9	80	89	
		(%)	(3.0)	(4.5)	(4.3)	
		調整済み残差	[-1.2]	[1.2]		
問4	他生ががんばっている 姿を見て	度数	6	28	34	
		(%)	(2.0)	(1.6)	(1.6)	
		調整済み残差	[0.5]	[-0.5]		
問5	読書やVTR視聴，外部 の先生の面接や講話を 通して	度数	18	96	114	
		(%)	(6.0)	(5.4)	(5.5)	
		調整済み残差	[0.4]	[-0.4]		
問6	いつの間にか自分にも できる（できない）と いう気持ちが出てきた	度数	61	204	265	
		(%)	(20.3)	(11.5)	(12.8)	
		調整済み残差	▲[4.3]	▼[-4.3]		
問7	目標としている成績が 達成されて（達成でき なくて）	度数	13	28	41	
		(%)	(4.3)	(1.6)	(2.0)	
		調整済み残差	▲[3.2]	▼[-3.2]		
問8	家族との面会や手紙を 通して	度数	89	799	888	
		(%)	(29.7)	(45.0)	(42.8)	
		調整済み残差	▼[-5.0]	▲[5.0]		
合 計		度数	300	1,777	2,077	
		(%)	(100.0)	(100.0)	(100.0)	

注1) \*\* は1%水準で有意差があることを示す。

注2) 残差分析の結果，▲は期待値より有意に高いこと，▼は有意に低いことを示す（5%水準）。

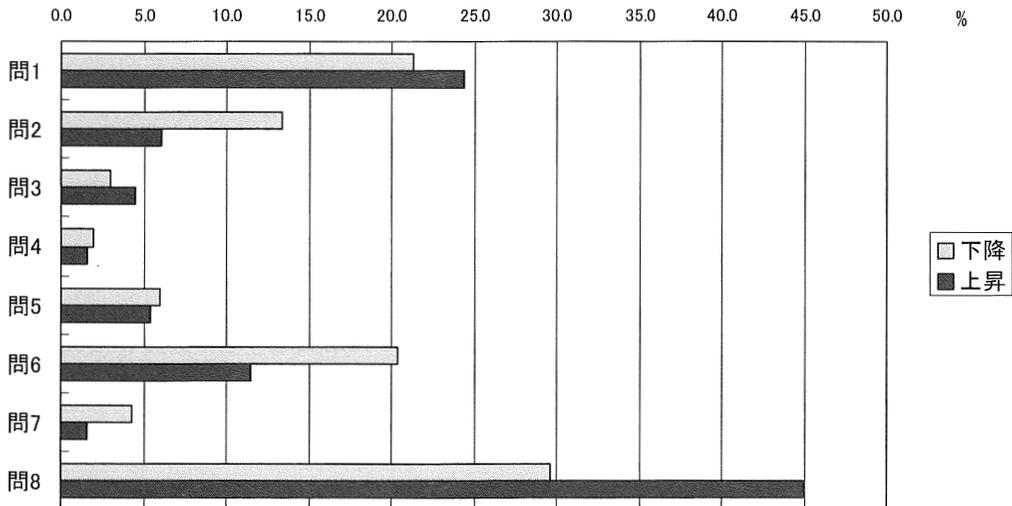


図36 自信度の変化（対人関係）

表40 自信度の変化（対人関係：長期処遇：教育過程別）

		中間期	出院期	合計	検定結果	
問1	先生との面接等とおして	度数	256	145	401	
		(%)	(20.8)	(31.2)	(23.7)	
		調整済み残差	▼[-4.5]	▲[4.5]		
問2	他生との話の中で	度数	75	27	102	
		(%)	(6.1)	(5.8)	(6.0)	
		調整済み残差	[0.2]	[-0.2]		
問3	実科や実習，資格の取得などを通して	度数	55	21	76	
		(%)	(4.5)	(4.5)	(1.0)	
		調整済み残差	[0.0]	[0.0]		
問4	他生ががんばっている姿を見て	度数	25	3	28	
		(%)	(2.0)	(0.7)	(1.7)	
		調整済み残差	[2.0]	[-2.0]		
問5	読書やVTR視聴，外部の先生の面接や講話を通して	度数	65	26	91	$\chi^2(7) = 27.89^{**}$
		(%)	(5.3)	(5.6)	(5.4)	
		調整済み残差	[-0.2]	[0.2]		
問6	いつの間にか自分にもできる（できない）という気持ちが出てきた	度数	156	43	199	
		(%)	(12.7)	(9.2)	(11.7)	
		調整済み残差	▲[2.0]	▼[-2.0]		
問7	目標としている成績が達成されて（達成できなくて）	度数	17	11	28	
		(%)	(1.4)	(2.4)	(1.7)	
		調整済み残差	[-1.4]	[1.4]		
問8	家族との面会や手紙を通して	度数	580	189	769	
		(%)	(47.2)	(40.6)	(32.4)	
		調整済み残差	▲[2.4]	▼[-2.4]		
合計		度数	1,229	465	1,694	
		(%)	(100.0)	(100.0)	(83.6)	

注1) \*\*は1%水準で有意差があることを示す。

注2) 残差分析の結果，▲は期待値より有意に高いこと，▼は有意に低いことを示す（5%水準）。

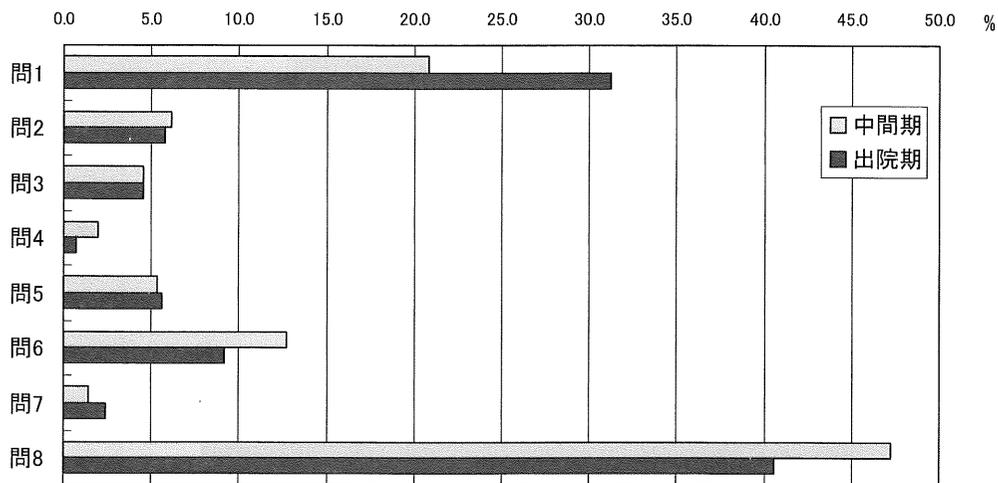


図37 自信度の変化（対人関係：長期処遇：教育過程別）

表41 自信度の変化（対人関係：短期・長期処遇別）

		短期	長期	合計	検定結果	
問1	先生との面接等とお して	度数	33	401	434	
		(%)	(39.8)	(23.7)	(24.4)	
		調整済み残差	▲[3.3]	▼[-3.3]		
問2	他生との話の中で	度数	6	102	108	
		(%)	(7.2)	(6.0)	(6.1)	
		調整済み残差	[0.4]	[-0.4]		
問3	実科や実習，資格の取 得などを通して	度数	4	76	80	
		(%)	(4.8)	(4.5)	(4.5)	
		調整済み残差	[0.1]	[-0.1]		
問4	他生ががんばっている 姿を見て	度数	0	28	28	
		(%)	(0.0)	(1.7)	(1.6)	
		調整済み残差	[-1.2]	[1.2]		
問5	読書やVTR視聴，外部 の先生の面接や講話を 通して	度数	5	91	96	P = 0.04 m*
		(%)	(6.0)	(5.4)	(5.4)	
		調整済み残差	[0.3]	[-0.3]		
問6	いつの間にか自分にも できる（できない）と いう気持ちが出てきた	度数	5	199	204	
		(%)	(6.0)	(11.7)	(11.5)	
		調整済み残差	[-1.6]	[1.6]		
問7	目標としている成績が 達成されて（達成でき なくて）	度数	0	28	28	
		(%)	(0.0)	(1.7)	(1.6)	
		調整済み残差	[-1.2]	[1.2]		
問8	家族との面会や手紙を 通して	度数	30	769	799	
		(%)	(36.1)	(45.4)	(45.0)	
		調整済み残差	[-1.7]	[1.7]		
合 計		度数	83	1,694	1,777	
		(%)	(99.9)	(100.1)	(100.1)	

注1) \*\* は1%水準で有意差があることを示す。

注2) 残差分析の結果，▲は期待値より有意に高いこと，▼は有意に低いことを示す（5%水準）。

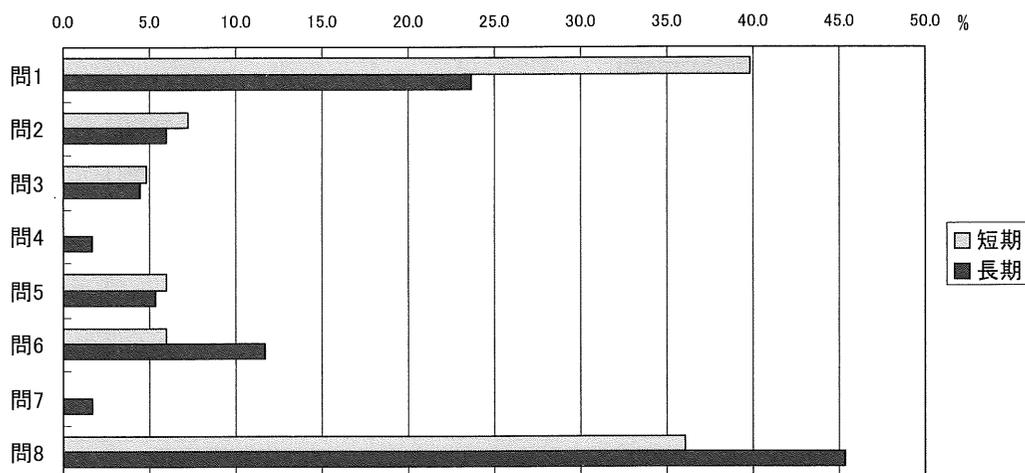


図38 自信度の変化（対人関係：短期・長期処遇別）

## (4) 本件非行予防

## ア 全体

入院時と比較して、自信をなくした者が213名、自信が付いた者が1,851名であった。

自信をなくした者が一番多く挙げたのは、「いつの間にか自分にもできないという気持ちが出てきた」であり、自信が付いた者は、一番影響を受けたものとして、「家族との面会や手紙を通して」を選択している。

これについて、 $\chi^2$ 検定を行った結果を表42、図39に示す。自信をなくした者では、「他生との話の中で」、「いつの間にか自分にもできないという気持ちが出てきた」、「目標としている成績が達成できなくて」が有意に多かった。また、自信が付いた者では、「家族との面会や手紙を通して」が有意に多かった。

表42 自信度の変化（本件非行）

			下降	上昇	合計	検定結果	
問1	先生との面接等をと おして	度数	35	391	426	$\chi^2(7) = 99.93^{**}$	
		(%)	(21.5)	(20.4)	(20.5)		
		調整済み残差	[0.3]	[-0.3]			
問2	他生との話の中で	度数	24	61	85		
		(%)	(14.7)	(3.2)	(4.1)		
		調整済み残差	▲[7.1]	▼[-7.1]			
問3	実科や実習、資格の取 得などを通して	度数	5	43	48		
		(%)	(3.1)	(2.2)	(2.3)		
		調整済み残差	[0.7]	[-0.7]			
問4	他生ががんばっている 姿を見て	度数	1	25	26		
		(%)	(0.6)	(1.3)	(1.3)		
		調整済み残差	[-0.8]	[0.8]			
問5	読書やVTR視聴、外部 の先生の面接や講話を 通して	度数	10	121	131		
		(%)	(6.1)	(6.3)	(6.3)		
		調整済み残差	[-0.1]	[0.1]			
問6	いつの間にか自分にも できる（できない）と いう気持ちが出てきた	度数	40	304	344		
		(%)	(24.5)	(15.9)	(16.6)		
		調整済み残差	▲[2.8]	▼[-2.8]			
問7	目標としている成績が 達成されて（達成でき なくて）	度数	15	54	69		
		(%)	(9.2)	(2.8)	(3.3)		
		調整済み残差	▲[4.4]	▼[-4.4]			
問8	家族との面会や手紙を 通して	度数	33	913	946		
		(%)	(20.2)	(47.8)	(45.6)		
		調整済み残差	▼[-6.8]	▲[6.8]			
合 計		度数	163	1,912	2,075		
		(%)	(100.0)	(100.0)	(100.0)		

注1) \*\*は1%水準で有意差があることを示す。

注2) 残差分析の結果、▲は期待値より有意に高いこと、▼は有意に低いことを示す（5%水準）。

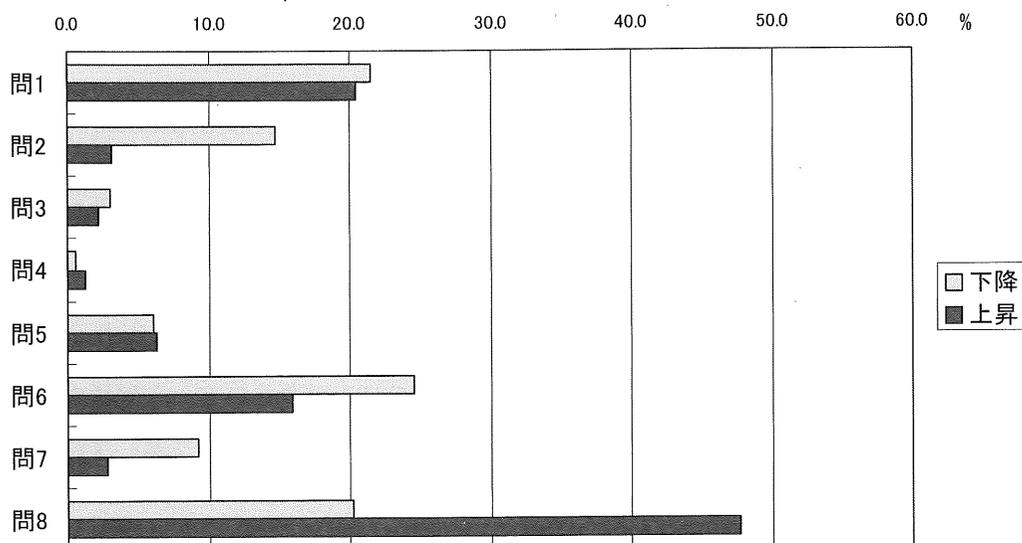


図39 自信度の変化 (本件非行)

表43 自信度の変化 (本件非行：長期処遇：教育過程別)

		中間期	出院期	合計	検定結果	
問1	先生との面接等をと おして	度数	254	109	363	$\chi^2(7) = 14.49^*$
		(%)	(19.0)	(22.6)	(19.9)	
		調整済み残差	[-1.7]	[1.7]		
問2	他生との話の中で	度数	42	19	61	
		(%)	(3.1)	(3.9)	(3.3)	
		調整済み残差	[-0.8]	[0.8]		
問3	実科や実習、資格の取 得などを通して	度数	33	8	41	
		(%)	(2.5)	(1.6)	(2.2)	
		調整済み残差	[1.0]	[-1.0]		
問4	他生ががんばっている 姿を見て	度数	18	5	23	
		(%)	(1.3)	(1.0)	(1.3)	
		調整済み残差	[0.5]	[-0.5]		
問5	読書やVTR視聴、外部 の先生との面接や講話を 通して	度数	80	34	114	
		(%)	(6.0)	(7.0)	(6.3)	
		調整済み残差	[-0.8]	[0.8]		
問6	いつの間にか自分にも できる(できない)と いう気持ちが出てきた	度数	220	80	300	
		(%)	(16.4)	(16.6)	(11.7)	
		調整済み残差	[-0.1]	[0.1]		
問7	目標としている成績が 達成されて(達成でき なくて)	度数	31	22	53	
		(%)	(2.3)	(4.6)	(2.9)	
		調整済み残差	▼[-2.5]	▲[2.5]		
問8	家族との面会や手紙を 通して	度数	662	206	868	
		(%)	(49.4)	(42.7)	(47.6)	
		調整済み残差	▲[2.5]	▼[-2.5]		
合計		度数	1,340	483	1,823	
		(%)	(100.0)	(100.0)	(95.2)	

注1) \* は5%水準で有意差があることを示す。

注2) 残差分析の結果、▲は期待値より有意に高いこと、▼は有意に低いことを示す(5%水準)。

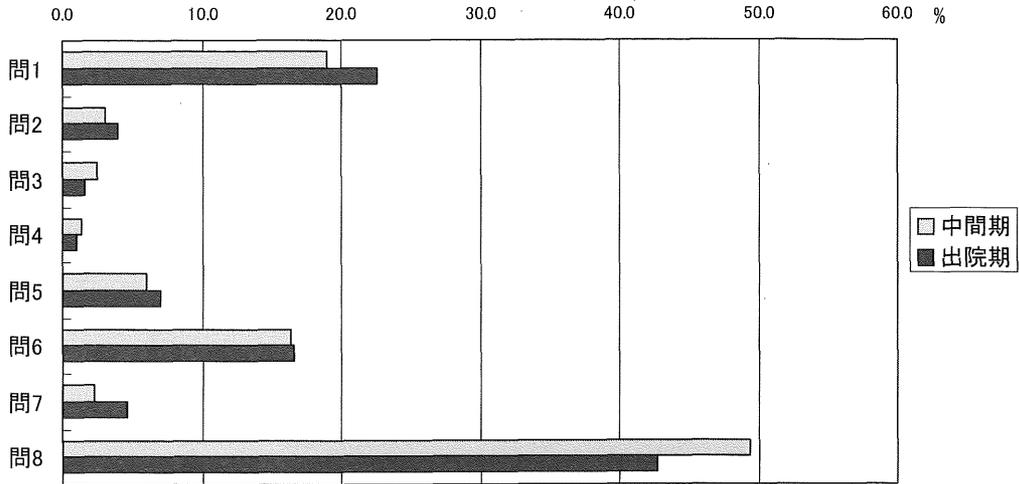


図40 自信度の変化（本件非行：長期処遇：教育過程別）

表44 自信度の変化（本件非行：短期・長期処遇別）

		短期	長期	合計	検定結果	
問1	先生との面接等とおして	度数 (%)	28 (31.5)	363 (19.9)	391 (20.4)	P = 0.02 m*
		調整済み残差	▲[2.6]	▼[-2.6]		
問2	他生との話の中で	度数 (%)	0 (0.0)	61 (3.3)	61 (3.2)	
		調整済み残差	[-1.8]	[1.8]		
問3	実科や実習，資格の取得などを通して	度数 (%)	2 (2.2)	41 (2.2)	43 (2.2)	
		調整済み残差	[0.0]	[0.0]		
問4	他生ががんばっている姿を見て	度数 (%)	2 (2.2)	23 (1.3)	25 (1.3)	
		調整済み残差	[0.8]	[-0.8]		
問5	読書やVTR視聴，外部の先生の面接や講話を通して	度数 (%)	7 (7.9)	114 (6.3)	121 (6.3)	
		調整済み残差	[0.6]	[-0.6]		
問6	いつの間にか自分にもできる（できない）という気持ちが出てきた	度数 (%)	4 (4.5)	300 (16.5)	304 (15.9)	
		調整済み残差	▼[-3.0]	▲[3.0]		
問7	目標としている成績が達成されて（達成できなくて）	度数 (%)	1 (1.1)	53 (2.9)	54 (2.8)	
		調整済み残差	[-1.0]	[1.0]		
問8	家族との面会や手紙を通して	度数 (%)	45 (50.6)	868 (47.6)	913 (47.8)	
		調整済み残差	[0.5]	[-0.5]		
合計		度数 (%)	89 (100.0)	1,823 (100.0)	1,912 (99.9)	

注1) \* は5%水準で有意差があることを示す。

注2) 残差分析の結果，▲は期待値より有意に高いこと，▼は有意に低いことを示す（5%水準）。

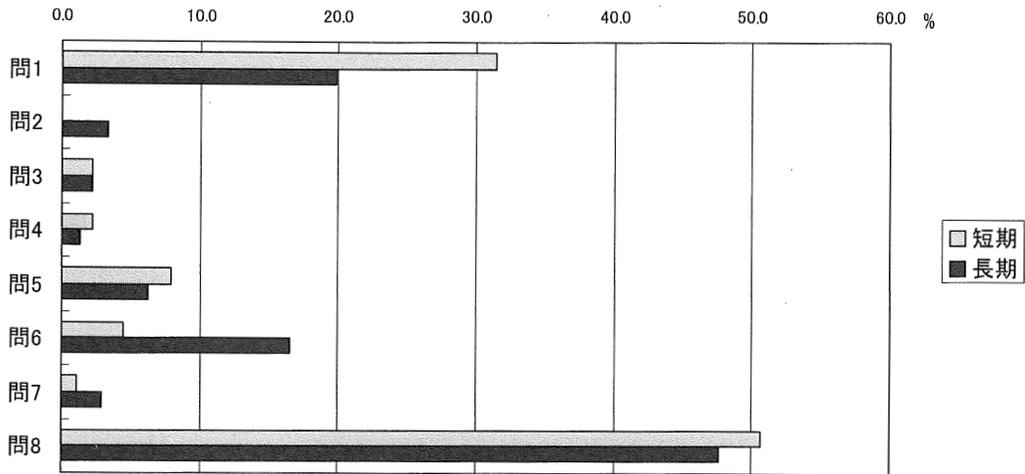


図41 自信度の変化 (本件非行：短期・長期処遇別)

#### イ 教育過程別

長期処遇で自信が付いた者の情報源に中間期と出院期で差があるかを見るため、 $\chi^2$  検定を行った結果を表43、図40に示す。中間期では、「家族との面会や手紙を通して」が有意に多く、出院期では、「目標としている成績が達成されて」が有意に多かった。

#### ウ 短期・長期処遇別

さらに、自信が付いた者の情報源に短期処遇と長期処遇で差があるかを見るため、 $\chi^2$  検定を行った結果を表44、図41に示す。短期処遇では、「先生との面接を通して」が有意に多く、長期処遇では、「いつの間にか自分もできるという気持ちが出てきた」が有意に多かった。

### (5) 本件以外の非行予防

#### ア 全体

入院時と比較して、自信をなくした者が213名、自信が付いた者が1,851名であった。

自信をなくした者が、一番多く理由として挙げたのは、「いつの間にか自分にもできないという気持ちが出てきた」であり、自信がついた者は、一番影響を受けたものとして、「家族との面会や手紙を通して」を選んでいる。

これについて、 $\chi^2$  検定及び残差分析の結果を、表45、図42に示す。自信をなくした者では、「他生との話の中で」、「実科や実習、資格取得などを通して」、「いつの間にか自分にもできないという気持ちが出てきた」が有意に多かった。また、自信が付いた者では、「家族との面会や手紙を通して」が有意に多かった。

表45 自信度の変化（本件以外の非行）

		度数	下降	上昇	合計	検定結果
問1	先生との面接等とお して	度数	39	353	392	
		(%)	(18.3)	(19.1)	(19.0)	
		調整済み残差	[-0.3]	[0.3]		
問2	他生との話の中で	度数	40	59	99	
		(%)	(18.8)	(3.2)	(4.8)	
		調整済み残差	▲[10.1]	▼[-10.1]		
問3	実科や実習，資格の取 得などを通して	度数	7	27	34	
		(%)	(3.3)	(1.5)	(1.6)	
		調整済み残差	▲[2.0]	▼[-2.0]		
問4	他生ががんばっている 姿を見て	度数	4	25	29	
		(%)	(1.9)	(1.4)	(1.4)	
		調整済み残差	[0.6]	[-0.6]		
問5	読書やVTR視聴，外部 の先生の面接や講話を 通して	度数	13	95	108	$\chi^2(7) = 170.80^{**}$
		(%)	(6.1)	(5.1)	(5.2)	
		調整済み残差	[0.6]	[-0.6]		
問6	いつの間にか自分にも できる（できない）と いう気持ちが出てきた	度数	62	289	351	
		(%)	(29.1)	(15.6)	(17.0)	
		調整済み残差	▲[5.0]	▼[-5.0]		
問7	目標としている成績が 達成されて（達成でき なくて）	度数	10	46	56	
		(%)	(4.7)	(2.5)	(2.7)	
		調整済み残差	[1.9]	[-1.9]		
問8	家族との面会や手紙を 通して	度数	38	957	995	
		(%)	(17.8)	(51.7)	(48.2)	
		調整済み残差	▼[-9.4]	▲[9.4]		
合 計		度数	213	1,851	2,064	
		(%)	(100.0)	(100.0)	(100.0)	

注1) \*\* は1%水準で有意差があることを示す。

注2) 残差分析の結果，▲は期待値より有意に高いこと，▼は有意に低いことを示す（5%水準）。

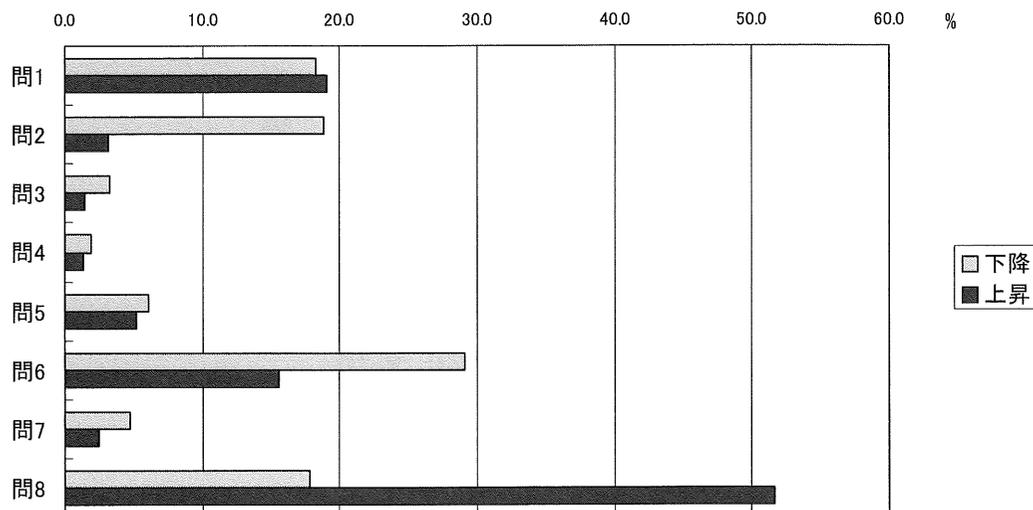


図42 自信度の変化（本件以外の非行）

## イ 教育過程別

長期処遇で自信が付いた者の情報源に、中間期と出院期で差があるかを見るために、 $\chi^2$  検定を行った結果を表46、図43に示す。中間期では、「家族との面会や手紙を通して」が有意に多く、出院期で「先生との面接を通して」が有意に多かった。

## ウ 短期・長期処遇別

自信が付いた者の情報源に、短期処遇と長期処遇で差があるかを見るために、 $\chi^2$  検定を行った結果を表47、図44に示す。短期処遇では「先生との面接を通して」が有意に多く、長期処遇では「いつの間にか自分もできるという気持ちが出てきた」が有意に多かった。

表46 自信度の変化（本件以外の非行：長期処遇：教育過程別）

		中間期	出院期	合計	検定結果	
問1	先生との面接等とおして	度数 (%)	206 (16.0)	113 (23.7)	319 (18.1)	$\chi^2(7) = 15.59^{**}$
		調整済み残差	▼[-3.8]	▲[3.8]		
問2	他生との話の中で	度数 (%)	43 (3.3)	15 (3.1)	58 (3.2)	
		調整済み残差	[0.2]	[-0.2]		
問3	実科や実習，資格の取得などを通して	度数 (%)	18 (1.4)	7 (1.5)	25 (1.4)	
		調整済み残差	[-0.1]	[0.1]		
問4	他生ががんばっている姿を見て	度数 (%)	17 (1.3)	7 (1.5)	24 (1.4)	
		調整済み残差	[-0.2]	[0.2]		
問5	読書やVTR視聴，外部の先生との面接や講話を通して	度数 (%)	64 (5.0)	26 (5.5)	90 (5.1)	
		調整済み残差	[-0.4]	[0.4]		
問6	いつも間にか自分にもできる（できない）という気持ちが出てきた	度数 (%)	216 (16.8)	70 (14.7)	286 (16.2)	
		調整済み残差	[1.0]	[-1.0]		
問7	目標としている成績が達成されて（達成できなくて）	度数 (%)	32 (2.5)	13 (2.7)	45 (2.6)	
		調整済み残差	[-0.3]	[0.3]		
問8	家族との面会や手紙を通して	度数 (%)	692 (53.7)	225 (47.3)	917 (52.0)	
		調整済み残差	▲[2.4]	▼[-2.4]		
合計		度数 (%)	1,288 (100.0)	476 (100.0)	1,764 (100.0)	

注1) \*\* は1%水準で有意差があることを示す。

注2) 残差分析の結果，▲は期待値より有意に高いこと，▼は有意に低いことを示す（5%水準）。

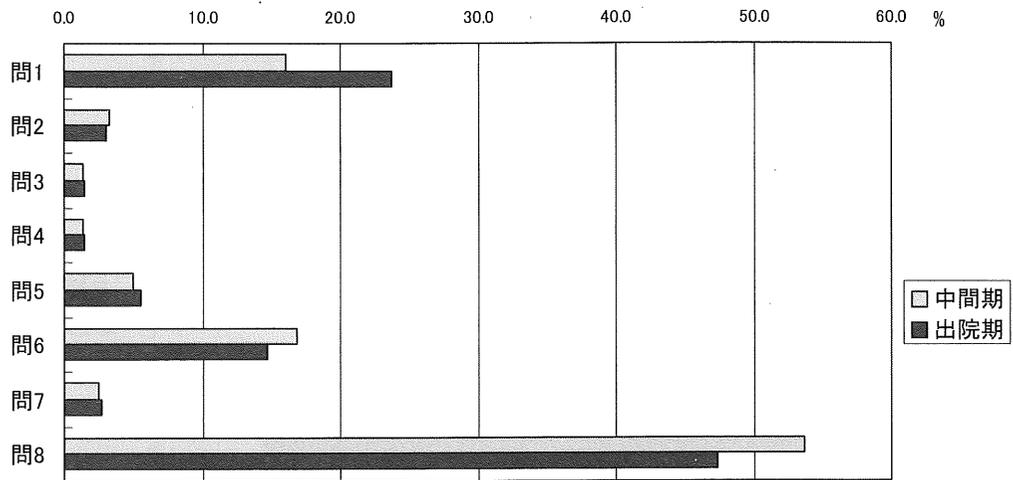


図43 自信度の変化（本件以外の非行：長期処遇：教育過程別）

表47 自信度の変化（本件以外の非行：短期・長期処遇別）

		短期	長期	合計	検定結果	
問1	先生との面接等をと して	度数 (%)	34 (39.1)	319 (18.1)	353 (19.1)	P = 0.00 m**
		調整済み残差	▲[4.9]	▼[-4.9]		
問2	他生との話の中で	度数 (%)	1 (1.1)	58 (3.3)	59 (3.2)	
		調整済み残差	[-1.1]	[1.1]		
問3	実科や実習，資格の取 得などを通して	度数 (%)	2 (2.3)	25 (1.4)	27 (1.5)	
		調整済み残差	[0.7]	[-0.7]		
問4	他生ががんばっている 姿を見て	度数 (%)	1 (1.1)	24 (1.4)	25 (1.4)	
		調整済み残差	[-0.2]	[0.2]		
問5	読書やVTR視聴，外部 の先生の面接や講話を 通して	度数 (%)	5 (5.7)	90 (5.1)	95 (5.1)	
		調整済み残差	[0.3]	[-0.3]		
問6	いつの間にか自分にも できる（できない）と いう気持ちが出てきた	度数 (%)	3 (3.4)	286 (16.2)	289 (15.6)	
		調整済み残差	▼[-3.2]	▲[3.2]		
問7	目標としている成績が 達成されて（達成でき なくて）	度数 (%)	1 (1.1)	45 (2.6)	46 (2.5)	
		調整済み残差	[-0.8]	[0.8]		
問8	家族との面会や手紙を 通して	度数 (%)	40 (46.0)	917 (52.0)	957 (51.7)	
		調整済み残差	[-1.1]	[1.1]		
合 計		度数 (%)	87 (99.8)	1,764 (100.1)	1,851 (100.1)	

注1) \*\* は1%水準で有意差があることを示す。

注2) 残差分析の結果，▲は期待値より有意に高いこと，▼は有意に低いことを示す（5%水準）。

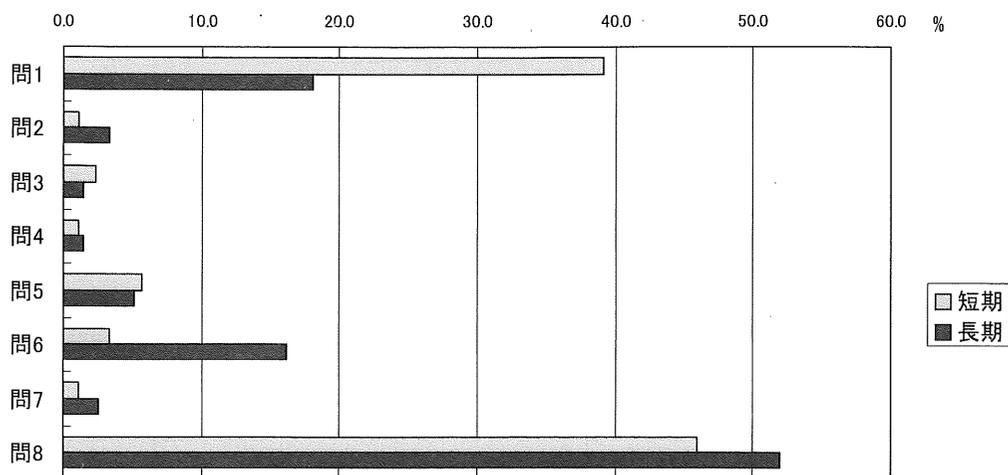


図44 自信度の変化 (短期・長期処遇別)

## 4 教育過程別の自信度の変化について

長期処遇を対象として、中間期と出院期の自己効力の変化について $\chi^2$ 検定を行った。結果を表48、図45に示す。

表48 長期処遇における教育過程別の自信度の変化

		中間期	出院期	合計	検定結果	
仕事	下降	度数 (%)	219 (14.5)	40 (7.7)	259 (12.8)	$\chi^2(1) = 16.16$
		調整済み残差	▲[4.0]	▼[-4.0]		
	上昇	度数 (%)	1,290 (85.5)	480 (92.3)	1,770 (87.2)	
		調整済み残差	▼[-4.0]	▲[4.0]		
交友関係	下降	度数 (%)	301 (19.9)	63 (12.2)	364 (17.9)	$\chi^2(1) = 15.73$
		調整済み残差	▲[4.0]	▼[-4.0]		
	上昇	度数 (%)	1,211 (80.1)	455 (87.8)	1,666 (82.1)	
		調整済み残差	▼[-4.0]	▲[4.0]		
対人関係	下降	度数 (%)	258 (17.1)	49 (9.5)	307 (15.2)	$\chi^2(1) = 17.39$
		調整済み残差	▲[4.2]	▼[-4.2]		
	上昇	度数 (%)	1,251 (82.9)	468 (90.5)	1,719 (84.8)	
		調整済み残差	▼[-4.2]	▲[4.2]		
本件非行	下降	度数 (%)	190 (12.6)	35 (6.8)	225 (11.1)	$\chi^2(1) = 13.40$
		調整済み残差	▲[3.7]	▼[-3.7]		
	上昇	度数 (%)	1,313 (87.4)	482 (93.2)	1,795 (88.9)	
		調整済み残差	▼[-3.7]	▲[3.7]		
本件以外非行	下降	度数 (%)	145 (9.6)	29 (5.6)	174 (8.6)	$\chi^2(1) = 7.81$
		調整済み残差	▲[2.8]	▼[-2.8]		
	上昇	度数 (%)	1,363 (90.4)	487 (94.4)	1,850 (91.4)	
		調整済み残差	▼[-2.8]	▲[2.8]		

注1) \*\* は1%水準で有意差があることを示す。

注2) 残差分析の結果、▲は期待値より有意に高いこと、▼は有意に低いことを示す(5%水準)。

仕事、交友関係、対人関係、本件非行予防、本件以外の非行予防の全ての項目で、入院時と比べて中間期に自信をなくした者が有意に多く、また、入院時と比べて出院期に自信が付いたとする者が有意に多かった。

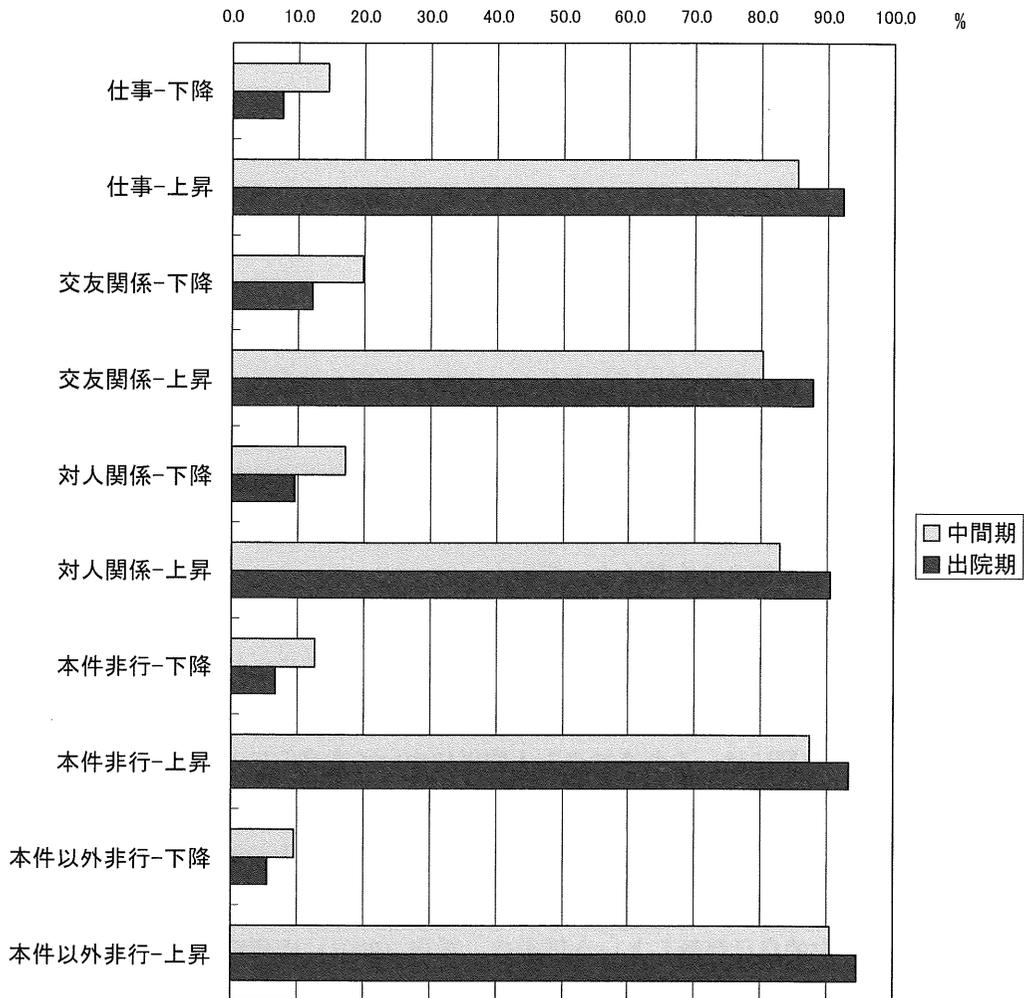


図 4 5 長期処遇における教育過程別の自信度の変化

## V 考察

ここでは、主に、少年院在院中の自己効力等の変化という観点から考察を行う。

## 1 自己効力について

### (1) 一般性自己効力 (GSE) について

一般性自己効力尺度を用いて測定した結果、いくつか属性の項目においては、その下位項目において有意差が見られているものの、教育過程における変化については、短期処遇で、「失敗に対する不安」が新入時に比べて出院期で高くなっている以外に有意差は見られなかった。

先に述べたように、一般性自己効力は、特定の行動に限定されない、より一般的な自己効力であることから、半年から1年という少年院の在院期間では変化しにくいと考えられる。こうした観点からすると、短期処遇よりも長期処遇の在院者の方が、非行性が進んでおり、変化にも時間が掛かる場合が多いため、このような結果になるのではないかと思われる。

### (2) 対人的自己効力について

「友人への信頼・安定感」、「友人からの信頼」、「対人スキルの自信」、「肯定的自己評価」の4因子が抽出されたが、教育過程別の差に関しては、短期処遇においては有意差は見られず、長期処遇では、出院期の「肯定的自己評価」は新入時より高くなっている。逆に、出院期の「友人への信頼・安定感」及び「友人からの信頼」については、新入期よりも低くなっていた。

少年院在院者の友人関係については、いわゆる向社会的な友人関係とは言い難く、非行の共犯であったりする場合も多い。質問項目中の「友人」に、こうした向社会的とは言い難い友人を想定している可能性は十分にあると思われる。少年院に入院して間もない時期には、これまでの友人関係について肯定的にとらえており、その後、少年院内における教育・指導が進むにつれて、その関係を冷静にとらえるようになるということは、実務上よく経験されることであり、上の結果は、このような経過に一致するものと考えられる。

一方、「肯定的自己評価」という因子は、松島(2001)の研究では抽出されていないが、友人関係と自尊感情について、松島(2001)は、「親密な友人関係が青年の自己概念や自己価値観を高め、青年の自尊感情が親密で適応的な友人関係の形成に大きな影響を及ぼすことが考えられる。」と述べており、両者のつながりが強いことを指摘している。長期処遇において、時間とともに肯定的自己評価が向上してくることは、向社会的で親密な友人関係を持つ方向に向かっていると解釈できるし、先に述べたように、「友人への信頼・安定感」と「友人からの信頼」の因子が時間の経過とともに下がる傾向を、これまでの友人との関係を冷静に考えるようになったと見れば、このことも、先の解釈に沿うものと言えるだろう。

### (3) 非行の自己効力について

非行の自己効力については、「メンバーとの関係」、「非行に対する有能感」、「緊張性・失敗性不安」の3因子について、長期処遇の教育過程間に有意差が見られた。具体的には、3因子とも中間期が新入時よりも高くなっており、このうち、「非行に対する有能感」は、新入時、出院期が、中間期よりも低いという結果となっている。つまり、全般的に、非行の自己効力は中間期で上昇するという結果が得られている。

この点については、いくつかの理由が考えられる。

祐宗ら（1985）は、「失敗経験は自己効力予期を低め、弱め、狭める傾向がある」と述べている。在院少年は、非行を行ったために、少年院送致という処分を受けたわけであり、新入時は、この失敗体験からあまり時間が経っていないことから、新入時の非行の自己効力が低いというのが一つの理由として考えられる。

少年院内での生活を続ける中で、一度下がった自己効力が再び上昇してくる理由としては、失敗経験から時間が経過することや、生活に慣れ、緊張感が下がっていくことが考えられる。それにより、社会内での非行の成功体験を思い出し、非行に対する自己効力が高まる可能性がある。

また、集団生活において、いわゆるインフォーマルな他の在院者との関わりを通して、非行に対する親和感が再び高まることもあると思われる。出院後、再非行をしない自信について尋ねた項目で、入院時と比較して自己効力が下がった者が挙げたのは、「他生との話の中で」という情報源であったことは、これを支持する結果と言える。ただし、この点については、少年院における処遇がおおむね適切に行われている現状を考えると、中間期の非行の自己効力が上がる原因として、皆無ではないにせよ、決定的に大きなものではないと考えられる。

もう一つ考えられる理由としては、新入時は、社会的に望ましい方向へのバイアスが特に強く掛かっているということが挙げられる。少年院での生活が始まったばかりの新入時には、緊張も高く、自分を良く見せようとする傾向も強いと考えられ、社会的に望ましい方向にバイアスが掛かる可能性がある。それが、中間期、出院期になると、そうしたバイアスが弱まり、ある程度、素直に回答するようになることが考えられる。

田村（1993）は、質問紙調査における非行少年の回答の歪曲について検討しているが、一般少年群、警察群、少年鑑別所群、少年院群の中では、少年鑑別所群で最も歪曲が大きくなることが示唆されている。このことから考えると、少年院の処遇過程ごとの回答の歪曲は、新入時が最大である可能性が高い。また、こうした現象が見られるのは、質問項目の善悪が比較的分かりやすい場合であるが、今回使用した質問項目は、これに当てはまる。この仮定が正しいとすると、実際には、新入時

の非行の自己効力はもっと高いということになる。

一方、「非行に対する有能感」が、中間期と比較して出院期で下がっていることについては、中間期以降の教育・指導の効果によるものと考えられる。

いくつか考えられる理由を挙げたが、複数の要因が関与している可能性もある。しかし、今回の結果からは原因を特定できないので、今後、さらに検討していく必要がある。

## 2 結果予期について

結果予期については、短期処遇では、教育過程の新入時と出院期の間に有意差は見られなかったものの、長期処遇においては、全ての項目で、中間期より出院期の方が結果予期が高いという結果が得られた。一方、新入時は、中間期や出院期との間に有意差が見られない項目もあった。

最後の点について考えると、現実的で具体的な方法を理解しているかという問題と、バイアスの問題が考えられる。

通常、新入時の少年に、出院後の具体的な見通しを持っている者は少ないと思われる。つまり、「あることをするための具体的な方法が分かっている」と回答した者も、実際には、本人が思っているほど具体的には分かっていない可能性があり、その後の教育・指導によって、現実的な対応を学ぶことにより、中間期では、新入時の考えが現実的ではないことを理解し、結果予期は、新入時より下がると考えられる。この点を検証するためには、具体的な内容に踏み込んだ、さらに詳細な検討が必要と思われる。

また、非行の自己効力で説明したように、新入時に、回答へのバイアスが強く掛かっている可能性もある。

## 3 自己効力の変化と情報源について

### (1) 仕事

仕事面の自己効力の変化については、先に述べたように「実科や実習、資格取得などを通して」自信が付いたとする者の割合が高い。これは、四つの情報源のうち、「遂行行動の達成」に該当すると考えられる。

祐宗ら（1985）は、「『遂行行動の達成』は、個人が自分で行動して必要な行動を達成できたという経験であるから、これを情報源とする自己効力は最ももっとも強く安定したものになると考えられる。」と述べている。「仕事」と、少年院での職業訓練や職業補導の実習との関連は当然深く、遂行行動を達成することが、自己効力の向上に大きく寄与していると思われる。

さらに、「家族との面会や手紙を通して」自信がついたという者の割合も高い。この傾向は他の自己効力でも見られる。当初、我々は、この項目は「言語的説得」に該当すると想定していたが、施設に収容されている少年院在院者にとって、家族との面会や手紙は、通常の「言語的説得」以上の意味を持っていることも考えられる。この点については後述する。

## (2) 交友関係

交友関係においては「先生との面接等をとおして」と「家族との面会や手紙を通して」自信が付いたという回答が多いが、「先生との面接等をとおして」は、典型的な「言語的説得」だと考えられる。

少年事件における共犯事件の多さから見ても、交友関係は非行との関連が深いと考えられている。出院後、不良交友を断ち切り、望ましい交友関係を持てるように、少年院では、職員が繰り返し強力な働き掛けを行っており、このことが反映された結果と見ることができる。

一方、「他生との話の中で」自信をなくしたと回答した者の割合が高くなっており、次の「対人関係」、「本件非行予防」、「本件以外の非行予防」においても、同様の傾向が見られる。少年同士のインフォーマルなかかわりなどのマイナスの要因が、自信を失わせることにつながっていることが推測されるが、調査結果からは、どのような話をしたのかが分からないため、この点に関しては、今後の検討の必要があると言える。

## (3) 対人関係

家庭や職場での対人関係を中心に尋ねた項目であるため、「家族との面会や手紙を通して」が自信の向上を促していることは理解できる。逆に、「他生との話の中で」自信を失っている状態も見られる。後者については、先ほど述べたとおりである。

また、長期処遇を教育過程別に見た場合、「先生との面接等をとおして」が、出院期に大きな要因となっており、この時期の職員からの「言語的説得」は、自己効力の変化に大きな影響を及ぼすと考えられる。

対人関係の自己効力については、職員や他の在院生との関わりという「代理的経験」よる変化が見られることを予想していたが、そのような結果を得ることはできなかった。これについては、質問項目を絞り込んだことと、項目の選択を一つに絞ったことにより、全体として家族との関係を重視する方向に向かった可能性もあると考えられる。

## (4) 本件非行予防

対人関係と同様に、「家族との面会や手紙を通して」が再犯予防の自信に大きく

影響を及ぼしている。一方、「他生との話の中で」自信を失い、また、「目標として  
いる成績が達成できなくて」も自信を失う要因となっている。

目標の成績を達成できないという場合、少年院での生活で、何らかの失敗をして  
いることが多いと考えられる。先にも述べた「失敗経験は自己効力予期を低め、弱  
め、狭める傾向がある」（祐宗ら、1985）という指摘から考えると、成績の低さが  
自己効力を低める効果を持つことは納得できる。

逆に、長期処遇における教育過程別の分析では、中間期よりも出院期の方が、  
「目標とされている成績が達成されて」再非行防止への自信が高まったと答える者  
が多い。出院に向けて、少年院内での生活が安定し、成績が向上することが、同じ  
失敗（非行）を繰り返さない自信につながるものと考えられる。

#### (5) 本件以外の非行予防

本件とは別に、非行全般に対する再非行予防の自信について尋ねたものだが、  
「実科や実習、資格取得をとおして」自信を失った者が多くなっている。〔(4)本件非  
行予防〕では、成績が自己効力変化の情報源として大きな影響を持つことが示唆さ  
れたが、「実科や実習、資格取得を通して」は、情報源としては「遂行行動の達成」  
に該当すると考えられ、これは仕事との関連が深いと思われる。このような結果と  
なった理由の一つとしては、「本件非行を繰り返すことはないと思うが、違った形  
で非行を行うとすれば、仕事がうまくいかない場合だ」と考える傾向がある可能性  
を挙げることができる。

また、「家族との面会や手紙をとおして」が自信を付ける大きな要因となってい  
るが、加えて、長期処遇における教育過程別の分析では、中間期よりも出院期の方  
が、「先生との面接等をとおして」再非行予防への自信が高まったと回答する者が  
多く、逆に、「家族との面会や手紙を通して」は、出院期より中間期の方が多くなっ  
ている。家族からの働き掛けが大きな影響を持つことに加え、出院が近づくにつれ、  
職員からのより具体的な言語的説得の効果が強くなるものと思われる。

#### 4 教育過程別の自己効力の変化について

長期処遇の中間期と出院期において、少年院内の自己効力の変化を尋ねた項目であ  
るが、全ての項目において、自己効力が低下した者は出院期より中間期に多く、自己  
効力が向上した者は、中間期より出院期に多くなっている。

これまで指摘したように、中間期において向社会的な自己効力が下がるのは、社会  
内における適応方法を漠然と考えていた在院者が、少年院での指導・教育によって、  
現実的、具体的な視点から考えるようになり、これまでの自分の考えは通用しないこ  
とを認識することによると考えられる。そして、出院期に再度自己効力が上昇するの

は、少年院の指導・教育を通して、困難な状況であっても、乗り越えることができると感じられるようになるからであろう。

このように向社会的な自己効力が下がると非行の自己効力が上昇するというような傾向も見受けられ、非行行動を抑制するためには向社会的な自己効力を高めることが効果があるとも考えられる。

## 5 重要度について

これまで触れていなかったが、全般的に結果に影響している要因として考えられるものとして、重要度（結果価値）（outcome-value）が挙げられる。重要度とは、自己効力研究における行動の予測因として注目されてきたもので、個人にとっての、その行動の重要性又は価値の大きさのことをいう。例えば、ある行動について、いくら結果予期と自己効力が高くても、本人にとってあまり意味がなければ、実行されにくいということが起こるわけである。

少年院に入る前の非行少年は、一般に、非行や不良交友に対する重要度が高く、逆に家庭や仕事の重要度は低かったと考えられるが、少年院における教育は、非行や不良交友に対する重要度を下げ、また、仕事や家庭に対する重要度を上げるような働き掛けを行っていると言える。特に、少年院に収容された少年にとって、自分のことを心配して待ってしてくれる家族の存在は大きく、少年院入院後、家庭の重要度は自ずと向上することが多いと思われる。

今回の結果では、自己効力が変化する情報源として、「家族からの面会や手紙を通して」が挙げられることが多かったが、この項目は、当初想定していた言語的説得という意味よりも、家庭の重要度の問題として考えた方が、理解しやすいと思われる。ただし、重要度が情報源を通じてどのように自己効力に影響するかという点については、さらに検討を重ねる必要があると思われる。

## 6 今後の課題

これまでの考察を踏まえると、すべての自己効力に当てはまるわけではないが、長期処遇においては、新入時の自己効力が高く、その後、中間期では下がり、出院期に再び上昇する傾向が見られる。しかし、短期処遇においては、収容期間が短いことを考慮し、新入時と出院期のデータしか取らなかったため、中間期に自己効力がどのように変化しているかをとらえることはできなかった。今後の検討課題だと考えられる。

また、在院中の自己効力の変化のパターンにおいて、新入時に回答の歪曲の問題を含んでいる可能性があることは、先に考察したとおりである。これに沿って考えると、新入時には調査方法を工夫する必要がある一方、中間期以降においては、本研究で採

用した各種の尺度を処遇効果の測定に利用できると考えられる。

新入時において調査方法を工夫する必要性については、岡本（1997）も指摘しているが、特に非行の自己効力尺度については、内容が反社会的なものであるうえ、向社会的な行動の尺度を応用して作成されていることから、回答者に質問の意図が分かりやすく、このことが回答を歪曲の影響を大きくすることが予想される。質問文自体の工夫に加え、社会的望ましさを測定する尺度を加えるといった工夫が考えられるだろう。

なお、自己効力と結果予期の関係、自己効力と成績評価の関係については、今回、十分な分析が行えなかったので、次回の「その2」で報告することとしたい。

## VI おわりに

本研究は、少年院在院者の少年院内での自己効力の変化を測定するとともに、変化を促す要因について検討した。結果を見ると、処遇の時間的な流れに伴う変化は、当初予想していたよりもはっきりした形で現れなかった。長期処遇については、各尺度のいくつかの因子において、教育過程による変化（新入時、中間期、出院期）が見られたものの、短期処遇においては、ほとんど有意差が見られなかった。

この点については、半年から1年という期間では、自己効力はほとんど変化しないのか、個人差が大きいと、今回のような横断的調査では、個々人の変化をうまくとらえ切れないのかなど、いくつかの可能性が考えられる。最初に述べたように、本研究では、「その2」として、各個人の変化を追う縦断的調査も実施している。結果については、「その2」で報告するが、今回の結果と合わせて検討することにより、少年院における自己効力の変化について、より詳細に考察することができると思われる。

最後に、本研究の実施に当たり、御協力を賜った法務省矯正局をはじめ少年院の各位に対して、心からの謝意を表します。

## 引用文献

- Bandura, A. 1977 Self-efficacy : Toward a Unifying Theory of Behavioral Change  
Psychological Review, Vol.84, No.2, 191-215
- Bandura, A. 1985 自己効力（セルフ・エフィカシー）の探求 祐宗省三ほか（編著）  
社会的学習理論の新展開, 金子書房, 103-141
- Harter, S. 1982 The Perceived Competence Scale for Children. Child  
Development, 53, 87-97

- 近藤文良・石井久美子 1997 自己効力の一般性と課題特殊性 滋賀大学教育学部紀要  
人文科学・社会科学, No47, 9-21
- 松島るみ 2001 青年期における対人的自己効力間尺度の検討 応用教育心理学研究,  
第18巻（通巻第24号）, 5-11
- 岡本英生 1997 非行・犯罪心理学における動機づけ研究—本邦における無力感と効力  
感に関する研究のこれまでと今後について— 犯罪心理学研究, 第35巻第2号, 53-61
- 岡本英生 1998 非行少年の仕事及び非行の自己効力・結果予期についての研究 犯罪  
心理学研究, 第36巻第1号, 1-22
- 坂野雄二・東條光彦 1986 一般性セルフ・エフィカシー尺度作成の試み 行動療法研  
究, 第12巻第1号, 73-82
- 坂野雄二・前田基成（編著） 2002 セルフ・エフィカシーの臨床心理学 北大路書房
- 祐宗省三・原野広太郎・柏木恵子・春木豊（編） 1985 社会的学習理論の新展開 金  
子書房
- 田村雅之 1993 質問紙調査における非行少年の回答の歪曲について 犯罪心理学研究,  
第31巻第1号, 1-12
- White, R. W. 1959 Motivation Reconsidered : The Concept of Competence.  
Psychological Review, 66, 297-333

## 参考文献

- バンデューラ A. 本明寛・野口京子（監訳）1997 激動社会の中の自己効力 金子書  
房 (Bandura, A. 1995 Self-efficacy in Changing Societies. University Press)
- Bandura, A. 2000 Self-efficacy : The Exercise of Control. W.H. Freeman and  
Company

## (資料1)

## 1 性別等

性別は、表一資1のとおりである。

## 2 年齢

年齢別人員は、表一資2のとおりである。全体の平均年齢は17.6歳、短期処遇の平均年齢は16.9歳、長期処遇の平均年齢は17.7歳で、長期処遇の方が高い。

## 3 非行種別

非行種別人員は、表一資3のとおりである。短期・長期処遇ともに窃盗が一番多い。短期処遇は、以下、道路交通法違反、傷害(致死を含む)、強盗、恐喝と続くが、長期処遇は、傷害(致死を含む)、強盗、道路交通法違反、恐喝、覚せい剤取締法違反の順となっている。

## 4 入院回数

入院回数別人員は、表一資4のとおりである。短期処遇においては、2回以上入院している者は1名のみであった。長期処遇では約70%が1回目で、約30%が2回以上であった。

## 5 知能SS

知能段階別人員は、表一資5のとおりである。短期・長期処遇とも知能SSが41～50、31～40の者が多く、全体で見ると62.7%を占める。

## 6 少年院種別等

少年院種別人員は、表一資6のとおりである。短期、長期処遇とも、約80%が中等少年院送致の者である。

## 7 処遇課程

処遇課程等別人員は、表一資7のとおりである。短期処遇においてはS3(進路指導課程)が約80%を占め、長期処遇においてはV2(職業能力開発課程)が51.1%、G1(生活訓練課程)が24.7%で、この二つの課程で75.8%を占めている。

## 8 学歴

学歴別人員は、表一資8のとおりである。短期処遇では約31%が中学卒業、約36%が高校中退となっている。長期処遇では約50%が中学卒業、約30%が高校中退となっている。

## 9 養育者

養育者の態様別人員は、表一資9のとおりである。短期処遇の約50%は実父母であり、約26%は実母のみとなっている。長期処遇の約43%は実父母であり、約30%が実母のみとなっている。

表一資1 性別（教育過程別，処遇区分別）

教育過程	男子			女子		合計				
	短期処遇		長期処遇	長期処遇						
	度数	(%)	度数	(%)	度数	(%)				
新入時	154	(61.6)	303	(14.4)	457	(19.4)	41	(15.1)	498	(18.9)
中間期			1,345	(63.7)	1,345	(57.0)	171	(62.9)	1,516	(57.6)
出院期	96	(38.4)	462	(21.9)	558	(23.6)	60	(22.1)	618	(23.5)
合計	250	(100.0)	2,110	(100.0)	2,360	(100.0)	272	(100.0)	2,632	(100.0)

表一資2 年齢

年齢	短期処遇（平均年齢：16.9）			長期処遇（平均年齢：17.7）				合計								
	新入時	出院期	計	新入時	中間期	出院期	計	平均年齢 17.6								
	度数	(%)	度数	(%)	度数	(%)	度数	(%)	度数	(%)						
14歳	8	(5.2)	5	(5.2)	13	(5.2)	16	(4.7)	41	(2.7)	1	(0.2)	58	(2.4)	71	(2.7)
15歳	25	(16.2)	8	(8.3)	33	(13.2)	40	(11.6)	139	(9.2)	30	(5.7)	209	(8.8)	242	(9.2)
16歳	32	(20.8)	20	(20.8)	52	(20.8)	53	(15.4)	187	(12.3)	66	(12.6)	306	(12.8)	358	(13.6)
17歳	39	(25.3)	23	(24.0)	62	(24.8)	78	(22.7)	279	(18.4)	81	(15.5)	438	(18.4)	500	(19.0)
18歳	28	(18.2)	20	(20.8)	48	(19.2)	70	(20.3)	323	(21.3)	116	(22.2)	509	(21.4)	557	(21.2)
19歳	18	(11.7)	16	(16.7)	34	(13.6)	78	(22.7)	354	(23.4)	112	(21.5)	544	(22.8)	578	(22.0)
20歳	4	(2.6)	4	(4.2)	8	(3.2)	9	(2.6)	185	(12.2)	109	(20.9)	303	(12.7)	311	(11.8)
21歳									8	(0.5)	6	(1.1)	14	(0.6)	14	(0.5)
22歳											1	(0.2)	1	(0.0)	1	(0.0)
合計	154	(100.0)	96	(100.0)	250	(100.0)	344	(100.0)	1,516	(100.0)	522	(100.0)	2,382	(100.0)	2,632	(100.0)

表一資3 非行種別

非行種別	短期処遇			長期処遇				合計
	新入時	出院期	計	新入時	中間期	出院期	計	
自動車・単車盜	1		1	3	28	11	42	43
竊盜	70	33	103	112	524	177	813	916
詐欺				4	10	2	16	16
恐喝	13	8	21	21	98	34	153	174
暴行	2	2	4	3	13	6	22	26
傷害(致死)	18	10	28	44	176	47	267	295
凶器準備		2	2	1	4	2	7	9
強盜	10	16	26	30	166	48	244	270
放火				4	10	5	19	19
殺人				1	26	8	35	35
強姦	6	1	7	15	59	16	90	97
強制わいせつ		1	1	15	23	9	47	48
業過致死傷	2	2	4	1	12	9	22	26
暴力行為等				4	7		11	11
その他の刑法犯	7	2	9	13	37	13	63	72
銃刀法				2	4		6	6
道交法	21	16	37	25	129	59	213	250
覚せい剤		1	1	10	85	38	133	134
麻薬・大麻	1	1	2	1	2	4	7	9
毒劇物	3		3	14	39	13	66	69
他の特別法犯		1	1		8	1	9	10
条例違反				1			1	1
虞犯				20	56	20	96	96
合計	154	96	250	344	1,516	522	2,382	2,632

表一資 4 入院回数

入院回数	短期処遇			長期処遇				合計
	新入時	出院期	計	新入時	中間期	出院期	計	
	度数 (%)	度数 (%)	度数 (%)	度数 (%)	度数 (%)	度数 (%)	度数 (%)	
1回	154 (100.0)	95 (99.0)	249 (99.6)	246 (71.5)	1,083 (71.4)	361 (69.2)	1,690 (70.9)	1,939 (73.7)
2回		1 (1.0)	1 (0.4)	85 (24.7)	364 (24.0)	133 (25.5)	582 (24.4)	583 (22.2)
3回				12 (3.5)	66 (4.4)	27 (5.2)	105 (4.4)	105 (4.0)
4回				1 (0.3)	3 (0.2)	1 (0.2)	5 (0.2)	5 (0.2)
合計	154 (100.0)	96 (100.0)	250 (100.0)	344 (100.0)	1,516 (100.0)	522 (100.0)	2,382 (100.0)	2,632 (100.0)

表一資 5 知能SS

知能SS	短期処遇			長期処遇				合計
	新入時	出院期	計	新入時	中間期	出院期	計	
	度数 (%)	度数 (%)	度数 (%)	度数 (%)	度数 (%)	度数 (%)	度数 (%)	
61以上	9 (5.8)	4 (4.2)	13 (5.2)	12 (3.5)	93 (6.1)	21 (4.0)	126 (5.3)	139 (5.3)
51~60	25 (16.2)	20 (20.8)	45 (18.0)	54 (15.7)	246 (16.2)	85 (16.3)	385 (16.2)	430 (16.3)
41~50	60 (39.0)	32 (33.3)	92 (36.8)	114 (33.1)	484 (31.9)	183 (35.1)	781 (32.8)	873 (33.2)
31~40	48 (31.2)	27 (28.1)	75 (30.0)	96 (27.9)	457 (30.1)	148 (28.4)	701 (29.4)	776 (29.5)
30以下	12 (7.8)	13 (13.5)	25 (10.0)	68 (19.8)	236 (15.6)	85 (16.3)	389 (16.3)	414 (15.7)
合計	154 (100.0)	96 (100.0)	250 (100.0)	344 (100.0)	1,516 (100.0)	522 (100.0)	2,382 (100.0)	2,632 (100.0)

表一資 6 少年院種別

種別	短期処遇			長期処遇				合計
	新入時	出院期	計	新入時	中間期	出院期	計	
	度数 (%)	度数 (%)	度数 (%)	度数 (%)	度数 (%)	度数 (%)	度数 (%)	
初等	32 (20.8)	17 (17.7)	49 (19.6)	47 (13.7)	227 (15.0)	73 (14.0)	347 (14.6)	396 (15.0)
中等	122 (79.2)	79 (82.3)	201 (80.4)	283 (82.3)	1198 (79.0)	416 (79.7)	1897 (79.6)	2098 (79.7)
特別				14 (4.1)	91 (6.0)	33 (6.3)	138 (5.8)	138 (5.2)
合計	154 (100.0)	96 (100.0)	250 (100.0)	344 (100.0)	1,516 (100.0)	522 (100.0)	2,382 (100.0)	2,632 (100.0)

表一資7 処遇課程

処遇課程	短期処遇			長期処遇				合計
	新入時	出院期	計	新入時	中間期	出院期	計	
	度数 (%)	度数 (%)	度数 (%)	度数 (%)	度数 (%)	度数 (%)	度数 (%)	度数 (%)
S 1	27 (17.5)	13 (13.5)	40 (16.0)					40 (1.5)
S 2	4 (2.6)	2 (2.1)	6 (2.4)					6 (0.2)
S 3	123 (79.9)	81 (84.4)	204 (81.6)					204 (7.8)
G 1				95 (27.6)	359 (23.7)	135 (25.9)	589 (24.7)	589 (22.4)
G 2				4 (1.2)	8 (0.5)	5 (1.0)	17 (0.7)	17 (0.6)
G 3				1 (0.3)	15 (1.0)		16 (0.7)	16 (0.6)
V 1				22 (6.4)	88 (5.8)	15 (2.9)	125 (5.2)	125 (4.7)
V 2				152 (44.2)	786 (51.8)	279 (53.4)	1217 (51.1)	1217 (46.2)
E 1				28 (8.1)	121 (8.0)	42 (8.0)	191 (8.0)	191 (7.3)
E 2					3 (0.2)	2 (0.4)	5 (0.2)	5 (0.2)
H 1				21 (6.1)	57 (3.8)	20 (3.8)	98 (4.1)	98 (3.7)
H 2				21 (6.1)	79 (5.2)	24 (4.6)	124 (5.2)	124 (4.7)
合計	154 (100.0)	96 (100.0)	250 (100.0)	344 (100.0)	1,516 (100.0)	522 (100.0)	2,382 (100.0)	2,632 (100.0)

表一資8 学歴

最終学歴	短期処遇			長期処遇				合計
	新入時	出院期	計	新入時	中間期	出院期	計	
	度数 (%)	度数 (%)	度数 (%)	度数 (%)	度数 (%)	度数 (%)	度数 (%)	度数 (%)
中学校未修了	1 (0.6)	1 (1.0)	2 (0.8)	5 (1.5)	11 (0.7)	4 (0.8)	20 (0.8)	22 (0.8)
中学校在学中	23 (14.9)	11 (11.5)	34 (13.6)	33 (9.6)	123 (8.1)	21 (4.0)	177 (7.4)	211 (8.0)
中学校卒業	51 (33.1)	27 (28.1)	78 (31.2)	173 (50.3)	748 (49.3)	280 (53.6)	1201 (50.4)	1279 (48.6)
高校在学中	15 (9.7)	8 (8.3)	23 (9.2)	21 (6.1)	52 (3.4)	25 (4.8)	98 (4.1)	121 (4.6)
高校中退	53 (34.4)	36 (37.5)	89 (35.6)	90 (26.2)	459 (30.3)	147 (28.2)	696 (29.2)	785 (29.8)
高校卒業	3 (1.9)	3 (3.1)	6 (2.4)	7 (2.0)	20 (1.3)	11 (2.1)	38 (1.6)	44 (1.7)
定時制高校在学中	3 (1.9)	2 (2.1)	5 (2.0)	4 (1.2)	21 (1.4)	9 (1.7)	34 (1.4)	39 (1.5)
定時制高校退学		3 (3.1)	3 (1.2)	4 (1.2)	31 (2.0)	14 (2.7)	49 (2.1)	52 (2.0)
専門学校在学中	1 (0.6)	1 (1.0)	2 (0.8)	1 (0.3)	4 (0.3)	1 (0.2)	6 (0.3)	8 (0.3)
専門学校中退		3 (3.1)	3 (1.2)	1 (0.3)	16 (1.1)	5 (1.0)	22 (0.9)	25 (0.9)
短大・大学在学中		1 (1.0)	1 (0.4)	2 (0.6)	6 (0.4)	1 (0.2)	9 (0.4)	10 (0.4)
短大・大学中退				1 (0.3)	4 (0.3)	1 (0.2)	6 (0.3)	6 (0.2)
不明					2 (0.1)		2 (0.1)	2 (0.1)
その他	4 (2.6)		4 (1.6)	2 (0.6)	19 (1.3)	3 (0.6)	24 (1.0)	28 (1.1)
合計	154 (100.0)	96 (100.0)	250 (100.0)	344 (100.0)	1,516 (100.0)	522 (100.0)	2,382 (100.0)	2,632

表一資9 養育者

保護者	短期処遇			長期処遇				合計
	新入時	出院期	計	新入時	中間期	出院期	計	
	度数 (%)	度数 (%)	度数 (%)	度数 (%)	度数 (%)	度数 (%)	度数 (%)	度数 (%)
実父母	76 (49.4)	48 (50.0)	124 (49.6)	166 (48.3)	644 (42.5)	217 (41.6)	1027 (43.1)	1151 (43.7)
実父	22 (14.3)	8 (8.3)	30 (12.0)	26 (7.6)	188 (12.4)	58 (11.1)	272 (11.4)	302 (11.5)
実母	39 (25.3)	25 (26.0)	64 (25.6)	102 (29.7)	449 (29.6)	171 (32.8)	722 (30.3)	786 (29.9)
養父母		1 (1.0)	1 (0.4)	2 (0.6)	7 (0.5)		9 (0.4)	10 (0.4)
実父義母	2 (1.3)	5 (5.2)	7 (2.8)	11 (3.2)	43 (2.8)	12 (2.3)	66 (2.8)	73 (2.8)
養父実母	9 (5.8)	7 (7.3)	16 (6.4)	19 (5.5)	103 (6.8)	32 (6.1)	154 (6.5)	170 (6.5)
他の親族	3 (1.9)	1 (1.0)	4 (1.6)	10 (2.9)	35 (2.3)	24 (4.6)	69 (2.9)	73 (2.8)
施設	2 (1.3)		2 (0.8)	2 (0.6)	13 (0.9)	2 (0.4)	17 (0.7)	19 (0.7)
その他	1 (0.6)	1 (1.0)	2 (0.8)	4 (1.2)	23 (1.5)	5 (1.0)	32 (1.3)	34 (1.3)
不明				2 (0.6)	11 (0.7)	1 (0.2)	14 (0.6)	14 (0.5)
合計	154 (100.0)	96 (100.0)	250 (100.0)	344 (100.0)	1,516 (100.0)	522 (100.0)	2,382 (100.0)	2,632 (100.0)





整理番号

[Empty box for整理番号]

ちょうさ  
CARIC調査

(少年用調査票II)

これは、あなたが飛行、仕事、友人関係についてどのように考えているかについての調査です。それぞれ、みんな考え方は違うので、どの考えが正しいとか、間違っているということはありません。また、この結果は、全員の分をまとめて取り扱いますので、名前を書く必要はありません。あなたの成績とも関係がありませんから、思ったまま、感じたままを答えてください。

[Empty box]

質問ごとに、自分の考えにあてはまる考えの番号を線で○印をつけ、下の例にならって答えてください。

あまり好きではない  
少し好き  
あまり好き  
好き  
① 2 3 4

例 質問 私は、サッカーをすることが好きである。

「あてはまる」が「一番あなたの考えに近いときは、ここに○をつけます。

次のページから質問に入ります。次のページに並んで、順番に答えてください。

質問1

あなた自身のことについてお尋ねします。次の1から16までの文章を読んで、右側の回答欄の「あてはまる」から「あてはまらない」までの考えに一番近いと思う考えの番号に○をつけてください。

回答欄

あてはまる  
あてはまらない  
あてはまる  
あてはまらない  
あてはまる  
あてはまらない

- 1 何か仕事をするとき、自信を持ってやるほうである。 1 2 3 4
2 過去に犯した失敗や嫌な経験が悪い出して、悪い気持ちになることがよくある。 1 2 3 4
3 友人より優れた能力がある。 1 2 3 4
4 仕事を終えた後、失敗したと感じることのほうが多い。 1 2 3 4
5 人と比べて劣る点が多い。 1 2 3 4
6 何かを決めるとき、うまくゆかないのではないかと不安になることが多。 1 2 3 4
7 ひっこみじあんなほうだと思う。 1 2 3 4
8 人より記憶力がよいほうである。 1 2 3 4
9 結果の真実しがつつかない仕事でも、積極的に取り組んでゆくほうだと思う。 1 2 3 4
10 どうやったらよいか決心がつかず仕事にとりかかれなことが多い。 1 2 3 4
11 友人よりも特に優れた知識を持っている分野がある。 1 2 3 4
12 どんなことでも積極的にこなすほうである。 1 2 3 4
13 小さな失敗でも人よりずっと気にするほうである。 1 2 3 4
14 積極的に活動するのは、苦手なほうである。 1 2 3 4
15 世の中に貢献できる力があると思う。 1 2 3 4

\*\*\* 次のページに並んでください。\*\*\*

(資料3)

質問2

あなた自身とあなたの友人の友人のことについてお尋ねします。たくさん友人がいる友人は、その中でも特に親しい友人のことを挙げてください。次の1から17までの文章を読んで、若原の回答欄の「とてもそう思う」から「まったくそう思わない」までのうち、あなたに一番近いと思う数字に○をつけてください。

- |    |                                 |   |   |   |   |
|----|---------------------------------|---|---|---|---|
| 1  | 友人はいつも私のことをわかってくれていると思う。        | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 2  | 友人に荷を託してもわかってくれていると思う。          | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 3  | 私が友人を助ければ一緒に行動してくれると思う。         | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 4  | 私は友人に信頼されている。                   | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 5  | 友人は私のことを嫌にならぬと思う。               | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 6  | 私は誰とでも気軽に話せる。                   | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 7  | 私には心から信頼できる友人がいる。               | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 8  | 私には友人として欲しいことをきちんと説明できる。        | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 9  | 友人は自分を必要としてくれている。               | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 10 | 困ったときは、友人に相談しようと思う。             | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 11 | 私にとって友人は頼りになるものだと思う。            | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 12 | 友人と意見を分かち合うことができると思う。           | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 13 | 初めて会う友人にでもうまく自己紹介ができる。          | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 14 | 私は自分で自分をほめることができる。              | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 15 | 私は今自分に満足している。                   | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 16 | 私は何歳まででなく、先輩後輩ともうまくやってくることができる。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 17 | 私は友だちといえることが好きである。              | 1 | 2 | 3 | 4 |

\*\*\* 次のページに進んでください。\*\*\*

質問3

仕事のことについてお尋ねします。ここでの「仕事」というのは、出稼ぎに就く仕事を挙げてください。次の1から20までの文章を読んで、若原の回答欄の「とてもそう思う」から「まったくそう思わない」までのうち、あなたに一番近いと思う数字に○をつけてください。

- |    |  |   |   |   |   |
|----|--|---|---|---|---|
| 1  | 仕事ができる自信がすぐある。   | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 2  | 仕事ができると親しい仲間からほめられる。   | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 3  | 仕事ができないと親しい仲間からバカにされる。   | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 4  | 仕事ができると親(いない友人は親がわりの友人)からほめられる。  | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 5  | 仕事ができないと親(いない友人は親がわりの友人)からバカにされる。                                      | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 6  | 仕事を1ヶ月以上つづける(これから仕事をするとつもりはない友人は、もし自分が仕事をすることになったら、と懇々と答えてください。)自信がある。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 7  | 仕事を1ヶ月以上つづけると親しい仲間からほめられる。   | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 8  | 仕事を1ヶ月以上つづげられないと親しい仲間からバカにされる。   | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 9  | 仕事を1ヶ月以上つづけると親(いない友人は親がわりの友人)からほめられる。                                  | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 10 | 仕事を1ヶ月以上つづけると親(いない友人は親がわりの友人)からバカにされる。                                 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 11 | 仕事を1年以上つづける自信がある。  | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 12 | 仕事を1年以上つづけると親しい仲間からほめられる。  | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 13 | 仕事を1年以上つづげられないと親しい仲間からバカにされる。  | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 14 | 仕事を1年以上つづけると親(いない友人は親がわりの友人)からほめられる。                                   | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 15 | 仕事を1年以上つづけると親(いない友人は親がわりの友人)からバカにされる。                                  | 1 | 2 | 3 | 4 |

\*\*\* 次のページに進んでください。\*\*\*

\*\*\* 引き継ぎ仕事についての質問に答えてください\*\*\*

回答前

まうくどう思われなら  
あつりやそ思われなら  
まうくどう思  
よとやそ思

- 16 仕事を10年以上正つづける自信がある。
- 17 仕事を10年以上正つづけると親しい仲間からほめられる。
- 18 仕事を10年以上正つづけれないと親しい仲間からバカにされる。
- 19 仕事を10年以上正つづけると親(いない人は親がわりの人)からほめられる。
- 20 仕事を10年以上正つづけると親(いない人は親がわりの人)からバカにされる。

質問4

あなたの非行のことについてお尋ねします。次の1から15までの文章を読んで、右欄の回答欄の「とても思う」から「まったく思わない」までのうち、あなかの答えに一番近いと思う差えの数字に○をつけてください。  
(条件非行とは、今回「少年鑑別所」に入ることになった非行のことです。ほかの質問でも同じ意味です。)

- 1 非行の楽しい思い出がたくさんある。
- 2 非行をしているとき、他の仲間はずまくできるよりに手助けしてくれた。
- 3 非行をしているとき、うまくできる方法を友だちが一緒に考えてくれた。
- 4 非行で失敗すると、友だちがもっとがんばれと励ましてくれた。
- 5 尋で非行すると、すぐにうまいくことが多かった。

\*\*\* 次のページに運んでください。\*\*\*

\*\*\* 引き継ぎ非行についての質問に答えてください\*\*\*

回答前

まうくどう思われなら  
あつりやそ思われなら  
まうくどう思  
よとやそ思

- 6 火よりも非行ではうまくできると思っている。
- 7 非行をする前から、失敗したと者のことを心配してしまう。
- 8 失敗や周りの目が気になるので、あまり非行は好きでない。
- 9 非行のとき、練習しすぎて失敗することがある。
- 10 どんな非行においても自分は素質があると思う。
- 11 条件非行とおなじようなことができる自信がある。
- 12 条件非行とおなじようなことができると思しい仲間からほめられる。
- 13 条件非行とおなじようなことができると思しい仲間からバカにされる。
- 14 条件非行とおなじようなことができると思しい(いない人は親がわりの人)からほめられる。
- 15 条件非行とおなじようなことができると思しい(いない人は親がわりの人)からバカにされる。

質問5

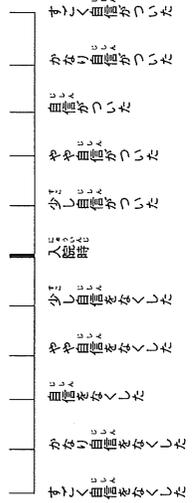
出稼の生活についてお尋ねします。次の1から5までの文章を読んで、右欄の回答欄の「よくわかった」から「まったくわからない」までのうち、あなかの答えに一番近いと思う差えの数字に○をつけてください。

- 1 仕事を続けていく具体的な方法がわかってる。
- 2 交友関係で失敗しない具体的な方法がわかってる。
- 3 組織や先輩の対人関係で失敗しない具体的な方法がわかってる。
- 4 条件非行と産と行わない具体的な方法がわかってる。
- 5 条件非行だけでなく再非行しない具体的な方法がわかってる。

\*\*\* 次のページに運んでください。\*\*\*

質問6  
少年院生活で、「仕事」についての自信がつきませんでしたか。  
答え方がならって、現在のあなたの自信の程度に二番当てはまるよところに○をつけてください。

入院したときと現在とで自信が変わらなかった場合は「入院時」のところに○をつけてください。

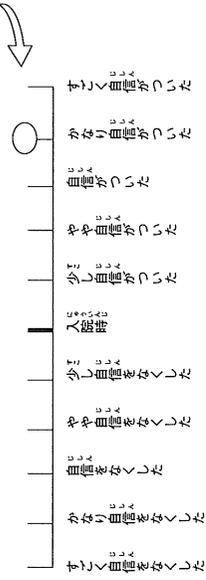


質問7  
「仕事」についての自信で、特に自分に影響があったと思うことを1から8までで、ひとつだけ選んで、その数字を○で囲んでください。  
あてはまるものがない場合でも、一番近いものをひとつ選んでください。

- 1 先生との面接等とおして
- 2 他生との話の中で
- 3 資料や実習、資格の取得などを通して
- 4 他生ががんばっている姿を見て
- 5 読書やVTR視聴、先生の面接や講話を通して
- 6 いつの間にか自分にもできる(できない)という気持ちが出てきた
- 7 目標としている成績が達成されて(達成できなくて)
- 8 家族との会話や手紙を通して

\*\*\* 次のページに進んでください。\*\*\*

ここからは、半の額にならって答えてください。  
例1 (質問6、8、10、12、14を回答するときの例)  
現在が入院時に比べて、「かなり自信がついた」場合には、ここに○をつけてください。



例2 (質問7、9、11、13、15を回答するときの例)  
質問 好きな色をひとつ選んで、その番号に○をつけてください。

- 1 赤
- 2 青
- 3 黄

\*\*\* 次のページに進んでください。\*\*\*



